松本市文化財調査報告　No.153

長野県松本市

OKANOMIYA

岡の宮遺跡 I

―緊急発掘調査報告書―

2001.3

松本市教育委員会

長野県松本市

OKANOMIYA

岡の宮遺跡 I

— 緊急発掘調査報告書 —

2001.3

松本市教育委員会

序

岡の宮遺跡は松本市女鳥羽3丁目において新しく発見された遺跡であり、今回が初めての発掘調査となります。

このたび当地にマンション建設事業が計画され、平成12年1月に行われた試掘調査において遺跡が存在することが確認されたため、松本市では株式会社穴吹工務店から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成12年2月から同年3月にかけて行われました。折からの寒風の中での調査となりましたが、関係者の皆様の御協力により無事終了することができました。発掘調査の結果、古墳時代と平安時代の生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと考えます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいた株式会社穴吹工務店の皆様、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

松本市教育委員会　教育長　　竹　淵　公　章

例　言

1 本書は、長野県松本市女鳥羽3丁目563－14において、平成12年2月20日から平成12年3月22日の間行われた岡の宮遺跡第Ⅰ次調査の報告書である。

2 本調査は、マンション建設事業に先立ち、株式会社穴吹工務店と松本市が発掘調査委託契約を締結し、それに基づいて松本市教育委員会が行った緊急発掘調査である。

3 本書の執筆はⅠ：事務局、Ⅱ：直井雅尚、Ⅴ－1･2：田多井用章、Ⅴ－3：太田圭郁、Ⅵ：パリノ・サーヴェイ株式会社、その他を小山高志が行った。

4 本書作製にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄：百瀬二三子

遺物保存処理・復元：内沢紀代子、洞沢文江、林　和子

遺構図整理：石合英子、太田圭郁、加島泰祐、櫻井　了、堀　久士

遺物実測：菊池直哉、竹平悦子、中谷高志、田多井用章

トレース・版組：開嶋八重子、太田圭郁、加島泰祐、櫻井　了、田多井用章、堀　久士

写真撮影：（遺構写真）加島泰祐、小山高志、米久保治郎　（遺物写真）宮嶋洋一

5 本書の中で使用した遺構名の略称は次のとおりである。

第1号住居址→1住もしくはSB01、第１号土坑→土1もしくはSK01、第1号ピット→Ｐ1もしくはSP01、焼土範囲1→焼1もしくはSF01。

6 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390－0823長野県松本市大字中山3738－1　TEL0263－86－4710　FAX0263－86－9189）に収蔵されている。

目　次

序
例言・目次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査体制 …… 1
Ⅱ　遺跡の環境 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 3
Ⅳ　遺構 …… 5
　1　竪穴住居址 …… 5
　2　土坑・ピット …… 7
　3　焼土範囲 …… 7
Ⅴ　遺物 …… 16
　1　土器 …… 16
　2　金属器 …… 17
　3　石器 …… 25
Ⅵ　付編 …… 30

写真図版

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

岡の宮遺跡は今回新しく発見された遺跡であり、女鳥羽川西岸、松本市街地東部に位置する。今回の調査地がある女鳥羽3丁目周辺は古くからの住宅街で、これまで本格的な調査が行われなかったこともあって、遺跡の存在が希薄な地域として従来認識されていた。

こうした中、平成11年、株式会社穴吹工務店によりマンション建設が計画され、事業予定地の埋蔵文化財に関して松本市教育委員会へ問い合わせがなされた。これに対し同教育委員会は、予定地は周知の遺跡には該当しないものの、松本城下町跡に近接していること、計画されている建物が高層マンションであるため基礎工事が地中深くに及ぶことなどから、マンションを建設する場合は、遺跡の有無及び範囲の確認のため試掘調査が必要であるとして株式会社穴吹工務店との協議を進めた。その後事業の実施が決定したため、同教育委員会は平成12年1月6日及び7日に試掘調査を行った。この試掘調査において古墳時代及び平安時代の遺構、遺物が確認されたことにより、城下町以前の未知の遺跡が存在することが明らかになった。

以上の結果を踏まえ両者で保護協議を行ったところ、マンション建設による遺跡の破壊は避けられないとの結論に至り、保護措置として工事着手前に緊急発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることとなった。平成12年2月14日付で松本市と事業主である株式会社穴吹工務店が委託契約を締結し、松本市教育委員会が発掘調査を行った。同教育委員会では次節のような発掘調査団を組織して同年2月20日から3月22日まで現地における調査を実施し、調査終了後は室内における整理作業及び本報告書の作成を行って、平成12年度、本報告書を刊行するに至った。

2　調査体制

調査団長　竹淵公章（松本市教育長）

調査担当　竹原　学（文化課主事）、田多井用章（同）、小山高志（同事務員）、米久保治郎（同嘱託）
加島泰祐（同）

調 査 員　今村　克、松尾明恵

協 力 者　石合英子、石川光男、内沢紀代子、岡村行夫、開嶋八重子、菊池直哉、高橋昭雄、竹平悦子、田中一雄、中上昇一、中谷高志、中山自子、林　和子、比嘉　仁、布山　洋、洞沢文江、待井敏夫、丸山惠子、道浦久美子、百瀬二三子、米山禎興

事 務 局　松本市教育委員会文化課
木下雅文（課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、酒井まゆみ（嘱託、～平成12年6月）
渡邊陽子（嘱託、平成12年7月～）、塚原祐一（同）

Ⅱ　遺跡の環境

岡の宮遺跡の周辺に分布する原始古代の遺跡を立地条件からみると、以下の４地域の遺跡群に大別できる。また、それらとは別に本遺跡の西～南西一帯は**松本城下町跡**(27)として近世の町屋遺構がひろがる。

第１の地域は蟻ヶ崎、沢村方面の大門沢川・東大門沢川の流域に位置し、**狐塚**(21)、**旧射的場西**(22)、**蟻ヶ崎**(25)、**峰ノ平**(32)、**城山腰**(33)などが該当する。時期的には、**峰ノ平**と**旧射的場西**で縄文中期、**城山腰**で弥生後期の遺構が発見されている他は、古墳後期と平安前期が中心となる。

第２は女鳥羽川左岸微高地に分布する遺跡群の地域で、**大村**(3)、**柳田**(4)、**大村古屋敷**(6)、**大輔原**(7)、**大村前田**(8)、**大村立石**(9)などが該当する。時期的には、**大村立石**で縄文中期、**柳田**では縄文中期と晩期が確認され、弥生後期も**大村古屋敷**で発見されている。古墳中期・後期は**大村古屋敷**と**大輔原**にあり、奈良時代以降は各遺跡で認められる。古くから各時代の集落が継続して営まれた安定したエリアといえる。

第３は前者と同様に女鳥羽川の左岸微高地だが東から合流してくる湯川の影響を受けている地域で、**大村塚田**(10)、**惣社**(11)、や**宮北**(16)の北部、**横田**(12)、**横田古屋敷**(13)、**女鳥羽川**(19)などが該当する。この特徴は**大村塚田**における縄文の大集落、**女鳥羽川**の縄文後晩期遺物や**横田古屋敷**の弥生中期集落と墓地など縄文弥生が目立つのに対し、奈良平安以降が希薄になる点であろう。

第４は薄川扇状地に分布するもので、**新井**(14)、**下原**(15)、**宮北**(16)、**県町**(18)などが該当する。同じ扇状地上でも、扇端部に位置する**県町**は弥生中期から平安まですべての時代が認められ、一方、扇央部にあたる**新井**、**下原**、**宮北**では集落の初源が古墳後期後半まで降り、以降は奈良平安で繁栄する。

ちなみに、本遺跡は女鳥羽川右岸に位置し上記のどの立地にも属さない。これは遺跡の一帯が江戸時代から城下町として開発され、同じ立地にある遺跡がほとんど確認できないためである。今後、城下町の原始古代の調査成果により、女鳥羽川右岸低地での遺跡群立地として新たな把握が可能になろう。

（太字は遺跡名、カッコ内の番号は第１図中のものに対応する）

第1図　周辺遺跡

Ⅲ　調査の概要

岡の宮遺跡は新しく発見された遺跡であり、今回が初めての発掘調査となる。調査地点は女鳥羽3丁目563－14にあたり、女鳥羽川から西へおよそ200m、岡の宮神社の北隣に位置する。標高は607m前後で、現在の地形は北東から南西へ向かって下る緩やかな傾斜地である。調査地点の現地表は道路面と平らになっているが、地表から1m近くは盛土がされ整地されていた。今回の調査では地表から1m20cm～1m50cmほどの深さでの検出を行った。検出面には南北方向に向かって縞状に礫が出土し、現地表と同様、北東から南西へ向かって緩やかに下る傾斜をみせた。検出面の基盤土は、調査区の東側は暗黄褐色だが大部分は暗褐色であったため、土色による遺構との識別は非常に困難であった。

調査の範囲については、主に建物が建つ予定である事業地の南側部分を優先し、約267㎡を調査区として設定した。調査区の中央部及び北壁中央部、西壁中央部には撹乱が入り、東壁から5m付近には水道管の埋設による撹乱が東壁と平行に走る調査区となった。

発掘調査の手順は、まず重機を使用して検出面までの上土を除去し、次に人力による遺構の検出作業を行った。土色の区別が微妙で平面的な把握が難しい部分が多かったが、遺物や礫の出土状況、土の内容物などを手掛かりとし、人力で試掘溝を掘り、断面観察も併用して遺構の位置と範囲を特定した。検出が終了した遺構から遺構番号を命名し、人力による掘り下げを開始した。必要に応じて遺構の断面や遺物の出土状況を写真あるいは測量図によって記録し、掘り下げと遺物の取り上げが全て終了した遺構から、写真と測量図の双方で記録した。遺構等の測量は、磁北方向に沿って任意の3m方眼を設定して行った。全ての掘り下げと記録が終わった後、重機を使用して調査区の南壁沿いを地表下2m程度まで掘り下げ、土層の確認を行った。最後に重機による埋め戻しを行い、発掘調査の現場における作業の全工程を終了した。

なお最後に行った土層確認の結果から、今回の検出面のさらに下層に、より古い時代の遺構もしくは遺物包含層が存在する可能性が考えられたが、確信を得るには至らなかった。今回の調査では、古墳時代前期及び平安時代中期から後期にかけての遺構、遺物が確認できた。遺構及び遺物の詳細については次章以降に述べるが、調査の実施期間、面積、遺構及び遺物の概要、基本土層を以下に記す。

調査期間　平成12年2月20日～平成12年3月22日

調査面積　267㎡

検出遺構

竪穴住居址

9軒：古墳時代前期4軒、平安時代中～後期3軒、不明2軒

（1住～11住を命名。ただし6住と8住は欠番となる。）

土坑　13基：古墳時代前期及び平安時代中期～後期

ピット　14基：古墳時代前期及び平安時代中期～後期

（P1～P15を命名。ただしP1は欠番となる。）

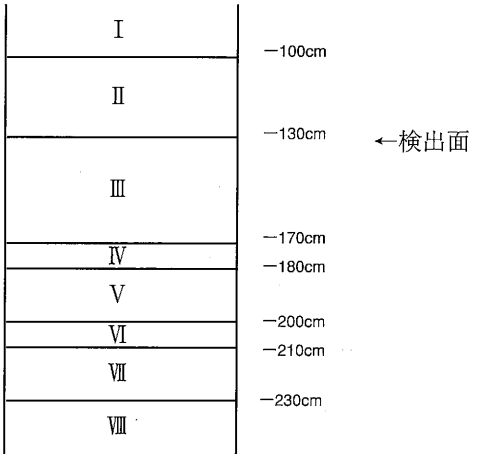
焼土範囲　2基

出土遺物

土器・陶磁器：土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器

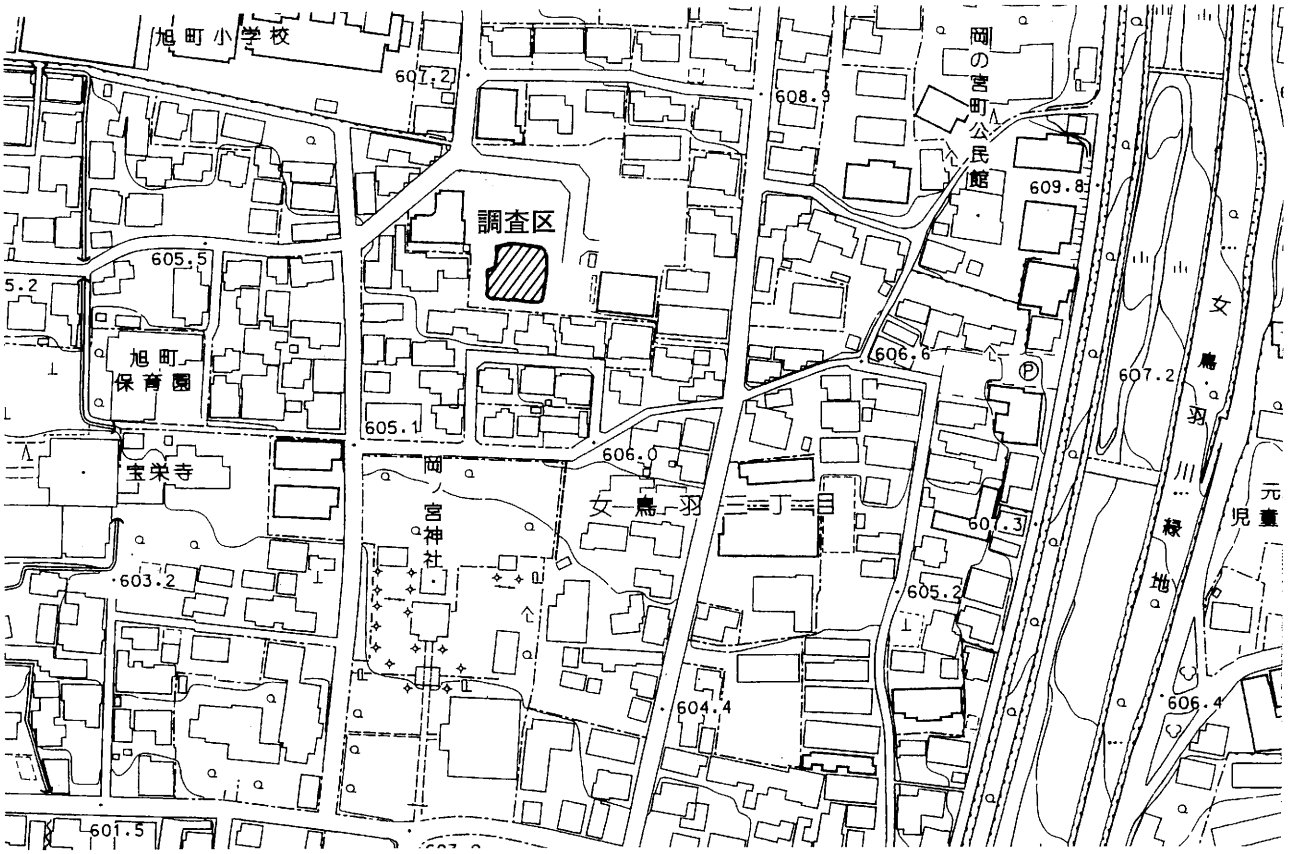
石器：施設構築材、剥片　　炭化木材

鉄製品：鎌、鋤、刀子、釘、不明品

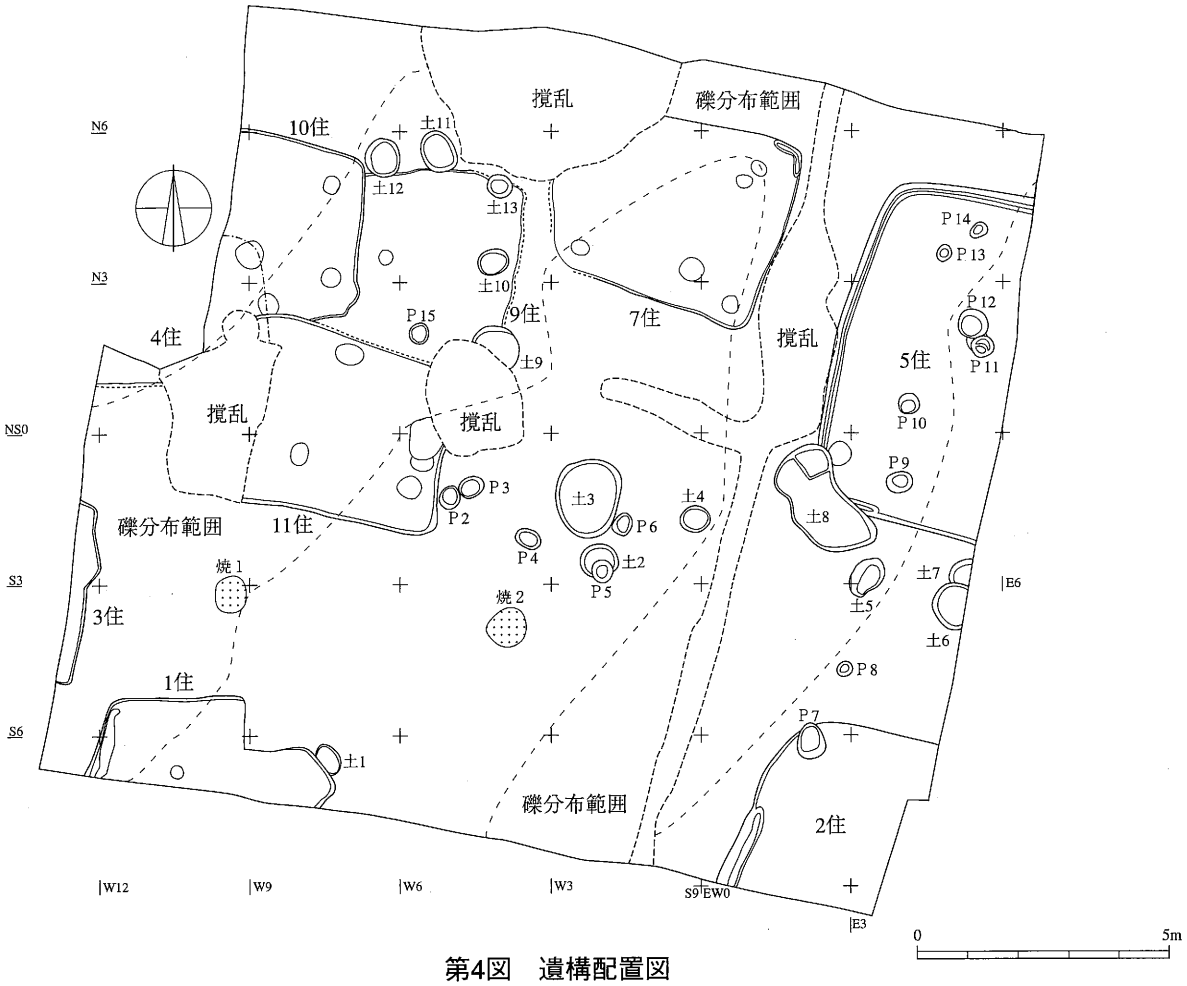


Ⅰ：表土
Ⅱ：暗褐色・粘質・1cm～5cm大の礫を微量含む
Ⅲ：暗褐色（Ⅱより明るい）・粘質だが砂混じり
Ⅳ：暗橙灰色・シルト質・1cm～10cm大の礫を含む
Ⅴ：橙灰色・シルト質だが砂混じり・
Ⅵ：暗橙褐色・シルト質・1cm以下の礫を少量含む
Ⅶ：黄褐色・シルト質・1cm～5cm大の礫を少量含む
Ⅷ：礫層（Ⅶの土を礫間に含む）

第2図　基本土層図



第3図　調査範囲図



第4図　遺構配置図

Ⅳ　遺構

1　竪穴住居址

竪穴住居址は第1号住居址から第11号住居址までの11軒を検出、命名したが、掘り下げを行った結果、第6号住居址及び第8号住居址の2軒は遺構ではないと判明したため欠番とした。また、カマドや炉、あるいはピットの存在が確認できない、床が明確でないなど、住居址としての要件を充分に確認できなかった遺構もあるが、これらについては検出時の名称のまま住居址として取り扱っている。その結果今回調査できた住居址は9軒となり、以下にそれぞれの詳細を記す。なお、それぞれの遺構の長軸、短軸、深さはcm単位で表した。

①　第1号住居址

調査区南端西寄りに位置する。遺構の大部分が調査区外にかかるため全容は不明だが、北側に張出し部分を持つ。当初、北側の張出し部分は1住とは別の住居址として調査を進めたが、西壁沿いの溝や床面及び覆土の状況から同一の住居と判断した。調査で明らかになった部分の規模は、長軸488、短軸192、深さ20。床面積は6.1㎡を測る。壁は明確で、比較的垂直に立ち上がる。張出し部分の東端は壁が明確に判明しなかったため、床面の状況から住居址の範囲を推定した。東壁に石組みカマドを持つが大部分は破壊され、火床面と袖の基底部、支脚石の一部が残る。周囲にはカマドの構築に用いたと思われる石材が散在していた。床は黄褐色土で堅く、今回調査できた住居址の中では最も明瞭であった。覆土は3層。重複関係は、東壁部分が土1を切っている。西壁沿いに溝、中央部にピットを一基有する。溝の規模は、幅15～30、床面からの深さ4～7、全長142。ピットは円形で、長軸28、短軸26、深さ22の規模を持つ。遺物は住居址内全体にみられ、土師器、灰釉陶器、鉄製品（釘等）が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から11世紀中頃～11世紀末に当たると考えられる。

②　第2号住居址

調査区の北東隅に位置する。Ｐ7に切られ、一部撹乱にあっている。検出面では暗黄褐色土が露出しており遺構を確認することが出来なかったが、検出面を掘り下げて遺構の存在が判明した。大部分が調査区外にかかるため全容は不明。炉、カマド及びピットの存在は確認できなかった。調査で明らかになった部分の規模は、長軸360、短軸320、深さ52。床面積は10.8㎡を測る。平面形は隅丸方形と推定される。床は不明瞭だが、西壁沿いに溝が認められた。検出面からの掘り込みは深く、壁は比較的垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は４層。遺物は覆土の上層から下層まで全般にみられたが、あまり多くない。遺構の帰属時期は、出土遺物から4世紀後半に該当すると考えられる。

③　第３号住居址

調査区の西端南寄りに位置する。調査区の西壁沿いに、ごく僅かに遺構が確認できた。遺構の大部分が調査区外にかかるため全容は不明。今回の調査で確認できた部分の規模は、長軸360、短軸56、深さ6。面積は1.1㎡。他の遺構との重複関係は無し。検出面からの掘り込みが非常に浅いため壁の残存状況が悪く、傾斜は不明。床は明確ではなく、基盤土をもって床とした。炉、カマド及びピットの存在は確認できなかった。遺物は土師器が少量出土したが帰属時期を特定するには至っていない。

④　第4号住居址

調査区の西端中央部に位置する。遺構の大半が調査区外にかかっており、南東部を撹乱によって破壊されているため、遺構が二つに分断されている。全容は不明だが、平面形は隅丸長方形と推定される。調査で明らかになった部分の規模は、長軸360、短軸300、深さ6。面積は10.2㎡を測る。床は明確ではなく、基盤土をもって床とした。炉、カマド及びピットの存在は確認できなかった。検出の段階においては、第4号住居址の北側及び東側の輪郭は全く不明であった。また、検出作業によって第10号住居址と第11号住居址の位

置と範囲が確定したため、この時点で4住は10住及び11住に切られていると重複関係を判断した。その後作業を進め第10号住居址の掘り下げを行ったところ、10住の床面において4住の北壁及び東壁に該当すると思われる輪郭が見えたため、ここで4住の範囲を確定した。なお、10住の掘り下げを行っている際、10住の中央南寄り、4住の北東隅と重複する部分で焼土が確認できたが、これについては焼土が出土した地点の高さと両住居址の床面の高さから、10住のものと判断した。4住の覆土から出土した遺物はごく少量で、帰属時期を特定するには至っていない。

⑤ **第５号住居址**

調査区の東端北寄りに位置する。遺構のおよそ半分が調査区外にかかり、調査区内に現れている部分は遺構の西側半分に該当すると思われる。重複関係は、土8、Ｐ9、Ｐ10、Ｐ11、Ｐ12、Ｐ13、Ｐ14に切られ、西側壁が一部撹乱にあっている。検出面では暗黄褐色土が露出しており遺構を確認することが出来なかったが、検出面をやや掘り下げたところで遺構の存在が判明した。調査で明らかになった部分の規模は、長軸696、短軸350、深さ10。面積は39.7㎡を測る。平面形は隅丸方形と推定される。壁はやや斜めに立ち上がるが、南側は北側に比べて遺構の掘り込みが浅くなっている。床は明確ではなく、基盤土をもって床とした。カマド、炉の存在は確認できなかったが、溝とピットが確認できた。溝は住居址の北壁から西壁の全面、南壁の西端にかけて壁沿いを走り、幅は20～30、床面からの深さは5～10、全長およそ11ｍの規模を持つ。ピットは中央部と南西隅に各1基ずつ、合計２基確認された。いずれも直径40～50ほどの円形で、深さは20程度。遺物は住居址内全体にみられたが、覆土上層には少なかった。土師器、鉄製品、炭化木材が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から4世紀後半に当たると考えられる。

⑥ **第７号住居址**

調査区北部、中央よりやや東寄りに位置する。遺構の北西部が撹乱にあっているが、他の遺構との重複関係は無い。遺構の規模は長軸472、短軸380、深さ18。面積は15.8㎡を測る。床面に特に堅い床は無く、住居址西側に明確な壁が認められなかったため、暗褐色の基盤土をもって床面とし、遺物や礫の出土状況から住居址の範囲を推定した。平面形は西側がやや突出する不整形な隅丸長方形となった。東側、南側、北側においては直に立ち上がる壁が確認できた。東壁の中央部北寄りに石組みカマドを有したと推定され、この周囲から住居址中央部にかけて、カマドの構築に用いられたと思われる石材及び自然礫が集中して出土している。北東隅の床面には短い溝が確認できた。ピットは5基確認できたが、いずれも掘り込みは浅く、柱痕も特に認められない。遺物は比較的多く、土師器、灰釉陶器が出土しており、遺構の帰属時期は、出土遺物から10世紀末から11世紀初頭に該当すると考えられる。

⑦ **第９号住居址**

調査区の中央部北西寄りに位置する。他の遺構との重複が激しく、10住、11住、土9、土10、土11、土12、土13、Ｐ15に切られ、住居址の南壁の東部が撹乱にあっている。調査で確認できた部分の規模は、長軸388、短軸380、深さ20。面積は11.8㎡を測る。床面に特に堅い床は無く、住居址東側に明確な壁が認められなかったため、暗褐色の基盤土をもって床面とし、遺物や礫の出土状況から住居址の範囲を推定した。遺構の西側を10住、南側を11住に切られているため全容は不明だが、平面形は隅丸方形と推定される。覆土は単層。カマド、炉は確認できなかった。ピットは一基、円形で直径30、深さ8ほどの規模のものが住居址の西側中央部に確認できた。礫が住居址全体から出土しているが、とりわけ南西部に集中している。土師器が多数出土しており、状態の良い遺物も多い。遺構の帰属時期は、出土遺物から4世紀後半に該当すると考えられる。

⑧ **第10号住居址**

調査区の西端北側に位置し、遺構の西側は調査区外にかかる。南西部は撹乱により破壊されている。他の遺構との重複が激しく、東壁が9住、南西部が4住を切り、南東部は11住に切られている。遺構の全容が確認

できないため平面形は不明。調査で確認できた部分の規模は、長軸460、短軸268、深さ20。面積は9.5㎡を測る。壁は直に立ち上がり、覆土は2層。特に堅い床は認められなかったため、基盤土をもって床とした。ピットは3基、北東隅、南東隅、南端中央部に確認された。北東隅、南東隅の2基は、直径20ほどの円形で深さは8程度。南端中央部の1基も、11住に切られ平面形はやや楕円形に近いものの、同程度の規模を持つ。なお、中央南寄りの床面において、直径50ほどの円形状に焼土が確認されており、10住の炉である可能性が高い。また、この周囲には薄く焼土が散っていることが確認できた。遺物は土師器が多数出土しており、状態の良い遺物も多い。また、礫が住居全体から出土しているが、南側にやや集中している。遺構の帰属時期は、出土遺物から4世紀後半に該当すると考えられる。

⑨　第11号住居址

調査区の中央部西側に位置する。9住、10住、4住を切るが、東壁の北部と西壁の大半が撹乱によって失われている。平面形は隅丸長方形と推定される。調査で明らかになった部分の規模は、長軸452、短軸380、深さ24。床面積は15.1㎡を測る。西側の壁は確認できなかったが、他の3方の壁は直に立ち上がる。覆土は8層。特に堅い床は認められなかったため、基盤土をもって床とした。カマド及び炉の存在は認められなかった。ピットは5基確認できたが、特に柱痕が認められるものは無かった。遺物は多く、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品（釘、鎌、鋏等）等が出土しており、また礫も住居址全体から出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から11世紀中頃から12世紀初頭に該当すると考えられる。

2　土坑・ピット

今回の調査では土坑13基、ピット14基を確認することが出来た。土坑とピットに明確な区別は無いが、比較的規模の大きなものを土坑、小さなものをピットとして命名した。なお、第1号ピットは掘り下げの結果遺構ではないと判明したため欠番とした。土坑・ピットの分布には偏りがみられ、4つの地区に大別できる。土1のみが存在する①調査区南西部と、②調査区中部（土2～土4、Ｐ2～Ｐ6）、③調査区東部（土5～土8、P7～P14）、④調査区北西部（土9～土13、Ｐ15）である。P5からは壷の一部、P7からは高杯の一部が出土しており、いずれも4世紀後半のものと考えられる。他の土坑・ピットからも遺物は出土しているが、それぞれの遺構からの出土量は僅かであり個々の遺構の帰属時期を特定するには至らない。しかしこれらの遺物はすべて土師器であり、今回調査できた古墳時代の住居址から出土した遺物と同様の特徴を有するものが多いため、遺構の帰属時期も同様と推定される。

3　焼土範囲

調査区南部において、円形状の焼土範囲が2ヶ所に確認された。この付近は遺物も多く、土師器、鉄製品、炭化物が出土しているため、当初は住居址の存在を想定し、検出及び試掘溝を掘っての断面観察を行ったが、遺構の存在が認められなかったため焼土範囲のみを遺構として命名した。焼1は暗褐色土中に在り、平面形は円形、断面形は台形。長軸72、短軸64、深さ8の規模を有す。焼2も暗褐色土中に在り、平面形はやや不正形な円形、断面形は皿形。長軸80、短軸72、深さ12の規模を有す。焼土２からは土師器が少量出土しているが、時期を特定するには至っていない。

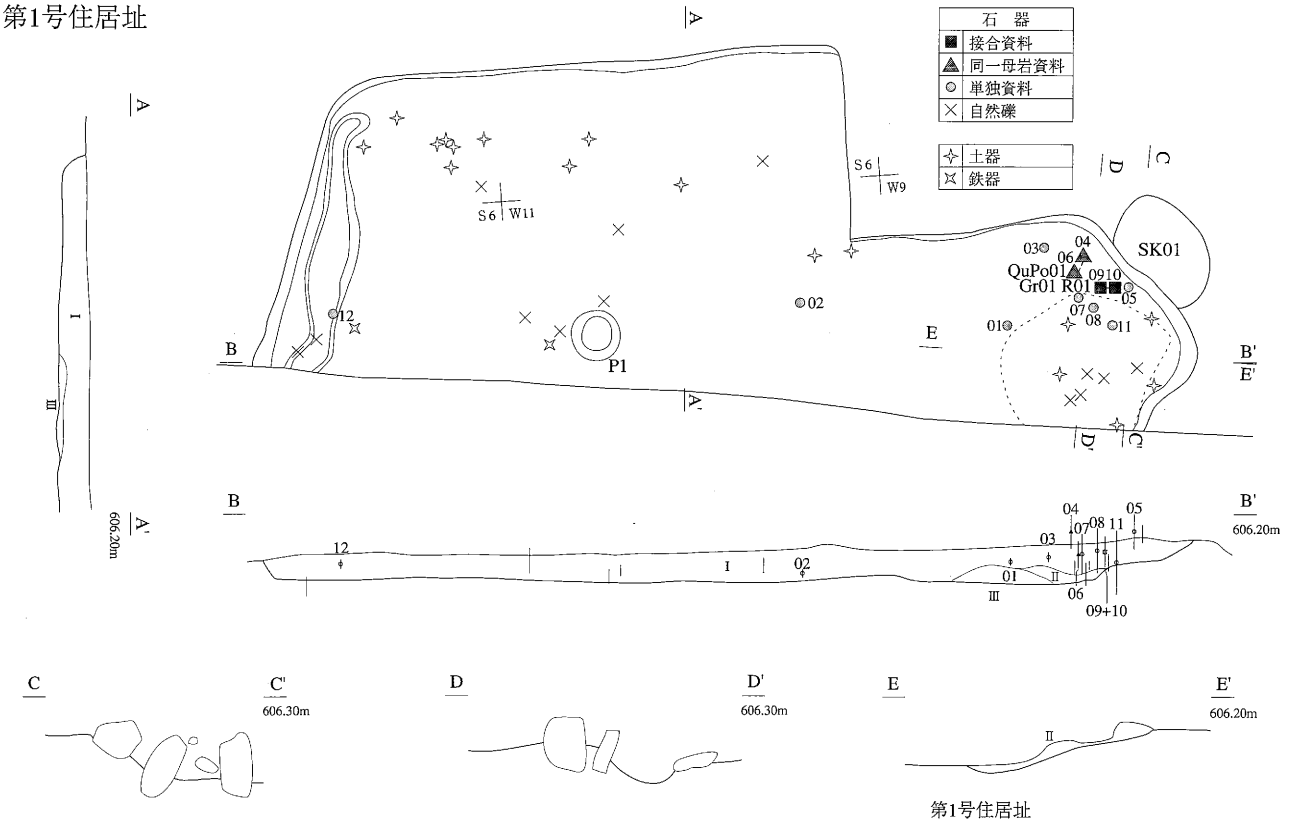
第1表　住居址一覧

住居	規模						
No.	長軸×短軸×深さ(cm)	床面積	主軸方向	平面形	カマド・炉	帰属時期	備考
1	488×192×20	6.1㎡	N-94°-E	不明	東壁、石組	11ｃ中～11ｃ末	土１を切る。調査区外にかかる。
2	360×320×52	10.8㎡	N-15°-E	隅丸方形	不明	4c後半	Ｐ７に切られる。撹乱にあう。
3	360×56×6	1.1㎡	不明	不明	不明	不明	調査区外にかかる。
4	360×300×6	10.2㎡	N-50°-W	隅丸長方形	不明	不明	10住、11住に切られる。調査区外にかかる。撹乱にあう。
5	696×696×10	42.9㎡	N-10°-E	隅丸長方形	不明	4c後半	土８、Ｐ９～14に切られる。撹乱にあう。
7	472×380×18	15.8㎡	N-106°-E	隅丸長方形	東壁、石組	10ｃ末～11ｃ初頭	撹乱にあう。
9	388×380×20	11.8㎡	N-11°-E	隅丸方形	不明	4c後半	10住、11住、土9～13に切られる。撹乱にあう。
10	460×268×20	9.5㎡	N-10°-W	不明	中央南寄りに炉	4c後半	調査区外にかかる。４住を切る。撹乱にあう。
11	452×380×24	15.1㎡	N-7°-E	隅丸長方形	不明	11ｃ中～12ｃ初頭	4住、9住を切る。撹乱にあう。

第2表　土坑・ピット一覧

遺構No.	分布	グリッド	長軸×短軸×深さ（ｃｍ）	平面形	遺物（帰属時期）	備考
土1	1	S6，W6	64×42×26	楕円形		1住に切られる。
土2	2	ＮＳ0，ＥW0	56×48×18	円形		P5に切られる。
土3	2	ＮＳ0，ＥW0	160×128×30	楕円形	土師器	
土4	2	ＮＳ0，ＥW0	60×50×22	楕円形		
土5	3	ＮＳ0，E6	84×60×24	楕円形		
土6	3	S3，E6	88×84×18	円形	土師器	土7を切る。調査区外にかかる。
土7	3	ＮＳ0，E6	80×68×24	楕円形	土師器	
土8	3	ＮＳ0，E3	232×124×16	不正隅丸長方形	土師器	
土9	4	N3，W3	96×80×12	楕円形	土師器	9住を切る。撹乱にあう。
土10	4	N6，W3	60×52×24	楕円形	土師器	9住を切る。
土11	4	N6，W3	80×64×12	楕円形	土師器	9住を切る。
土12	4	N6，W6	76×68×12	円形		9住を切る。
土13	4	N6，W3	52×44×20	円形	土師器	
P2	2	ＮＳ0，EW3	43×40×27	円形	土師器	
P3	2	ＮＳ0，EW3	50×38×27	楕円形		
P4	2	ＮＳ0，EW3	52×38×20	楕円形	土師器	
P5	2	ＮＳ0，EW0	43×42×27	円形	土師器（壷。4ｃ後半）	土2を切る。
P6	2	ＮＳ0，EW0	44×40×35	楕円形		
P7	3	S6，E3	68×56×35	楕円形	土師器（高杯。4ｃ後半）	2住を切る。
P8	3	S3，E3	30×28×29	円形		
P9	3	ＮＳ0，E6	50×44×16	楕円形	土師器	5住を切る。
P10	3	N3，E6	40×39×21	円形		5住を切る。
P11	3	N3，E6	44×42×24	円形		5住、P12を切る。
P12	3	N3，E6	56×56×28	円形		5住を切る。P11に切られる。
P13	3	N6，E6	64×42×26	楕円形		5住を切る。
P14	3	N6，E6	40×30×23	楕円形	土師器	5住を切る。
P15	4	N3，W3	38×38×10	円形		9住を切る。

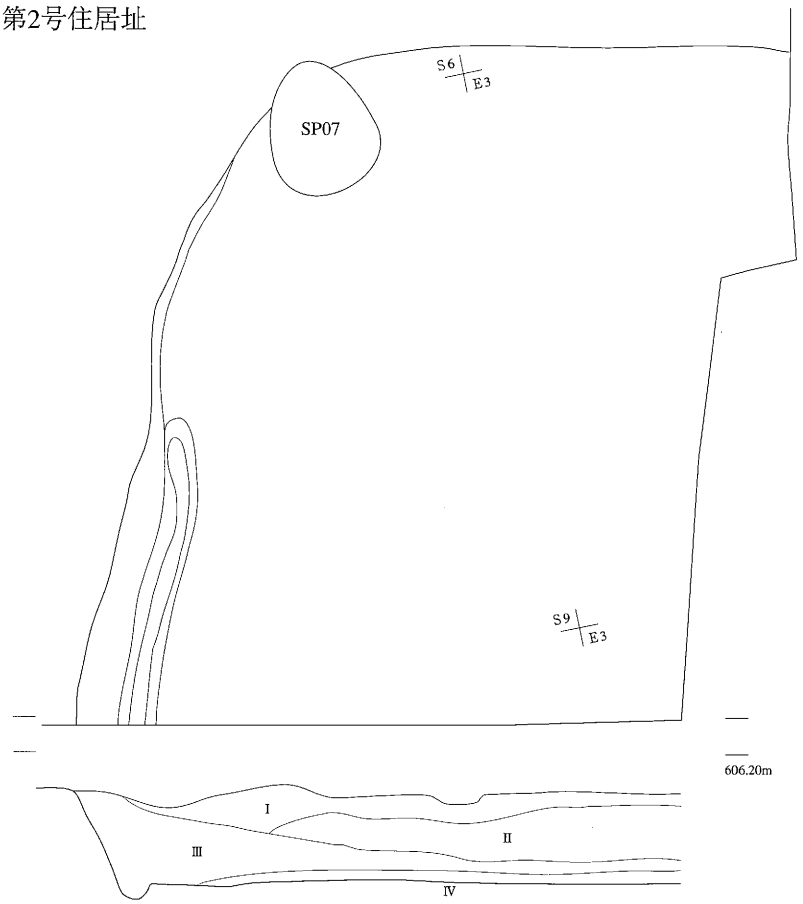
第1号住居址



第1号住居址

Ⅰ:暗褐色土(粘質　黄褐色土粒多量混入)
Ⅱ:暗褐色土(粘質　焼土･炭化物粒少量混入)
Ⅲ:暗褐色土(粘質　焼土･炭化物粒中量混入)

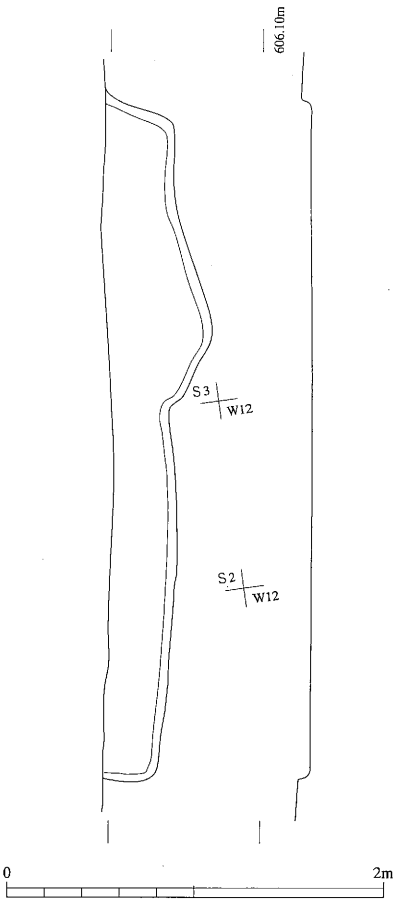
第2号住居址



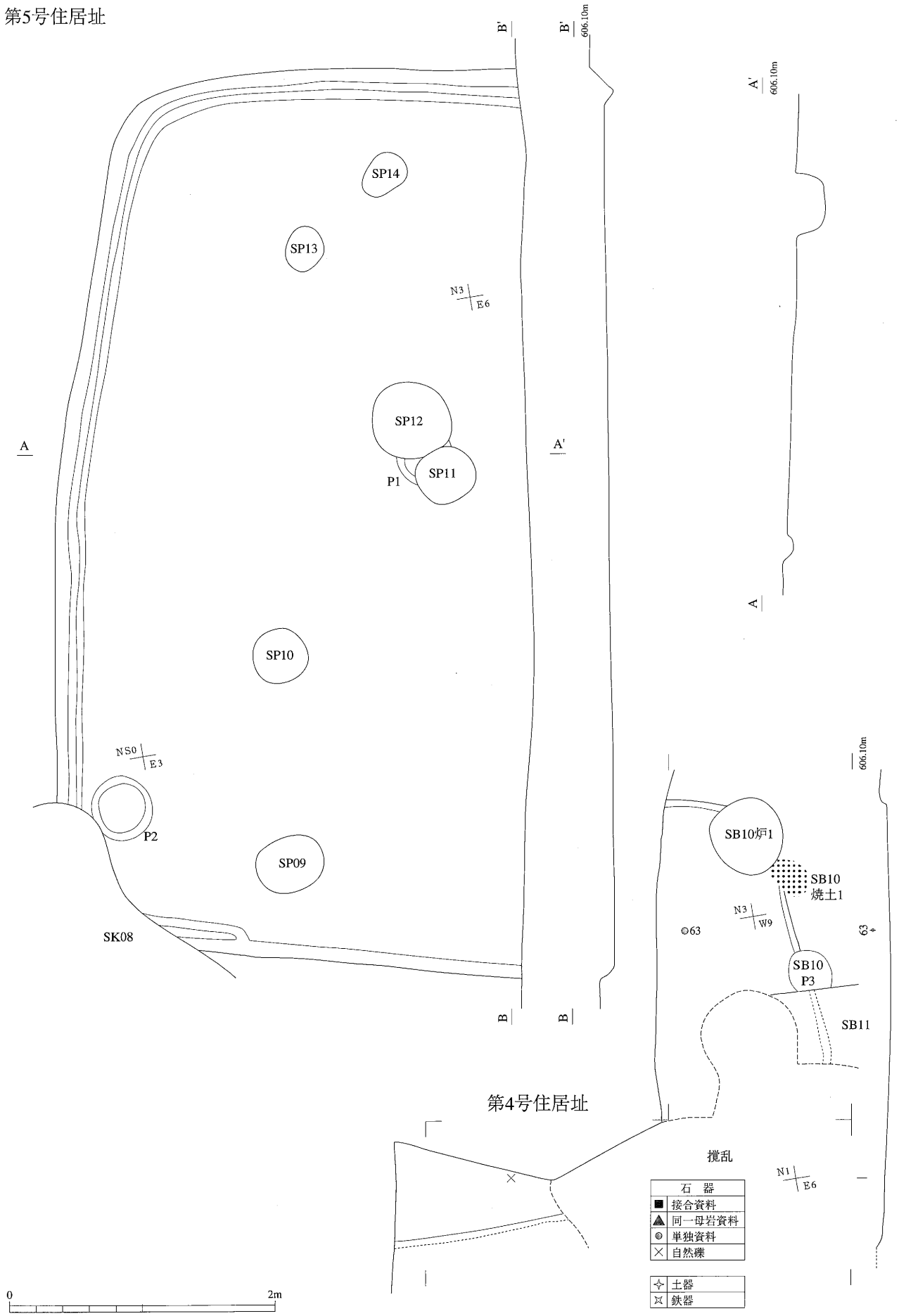
第2号住居址

Ⅰ:暗褐色土(黒色土粒中量混入)
Ⅱ:褐色土(黄褐色土粒少量混入)
Ⅲ:暗褐色土(焼土粒少量混入)
Ⅳ:暗褐色土(茶褐色土少量混入)

第3号住居址

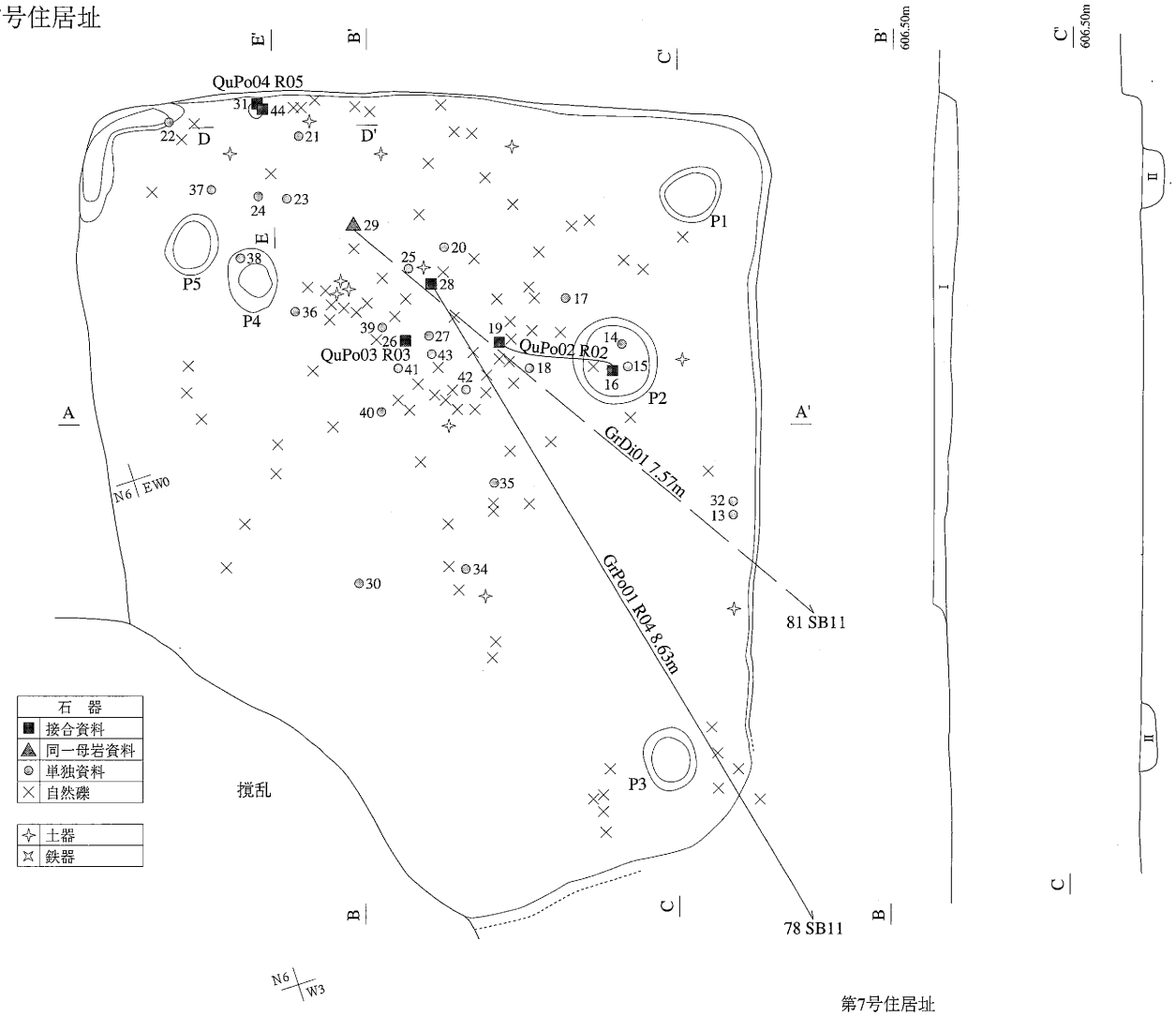


第5図　出土遺構(その1)


第5号住居址
B'
B'
606.10m
A'
606.10m
SP14
SP13
N3
E6
SP12
SP11
P1
A
A'
A
SP10
NS0
E3
P2
SP09
SK08
B
B
606.10m
SB10炉1
SB10
焼土1
N3
W9
63
63
SB10
P3
SB11
第4号住居址
撹乱
N1
E6
石　器
接合資料
同一母岩資料
単独資料
自然礫
土器
鉄器
0
2m

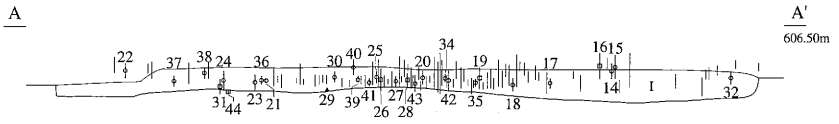
第6図　出土遺構(その2)

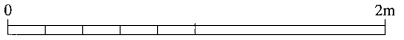
第7号住居址



第7号住居址

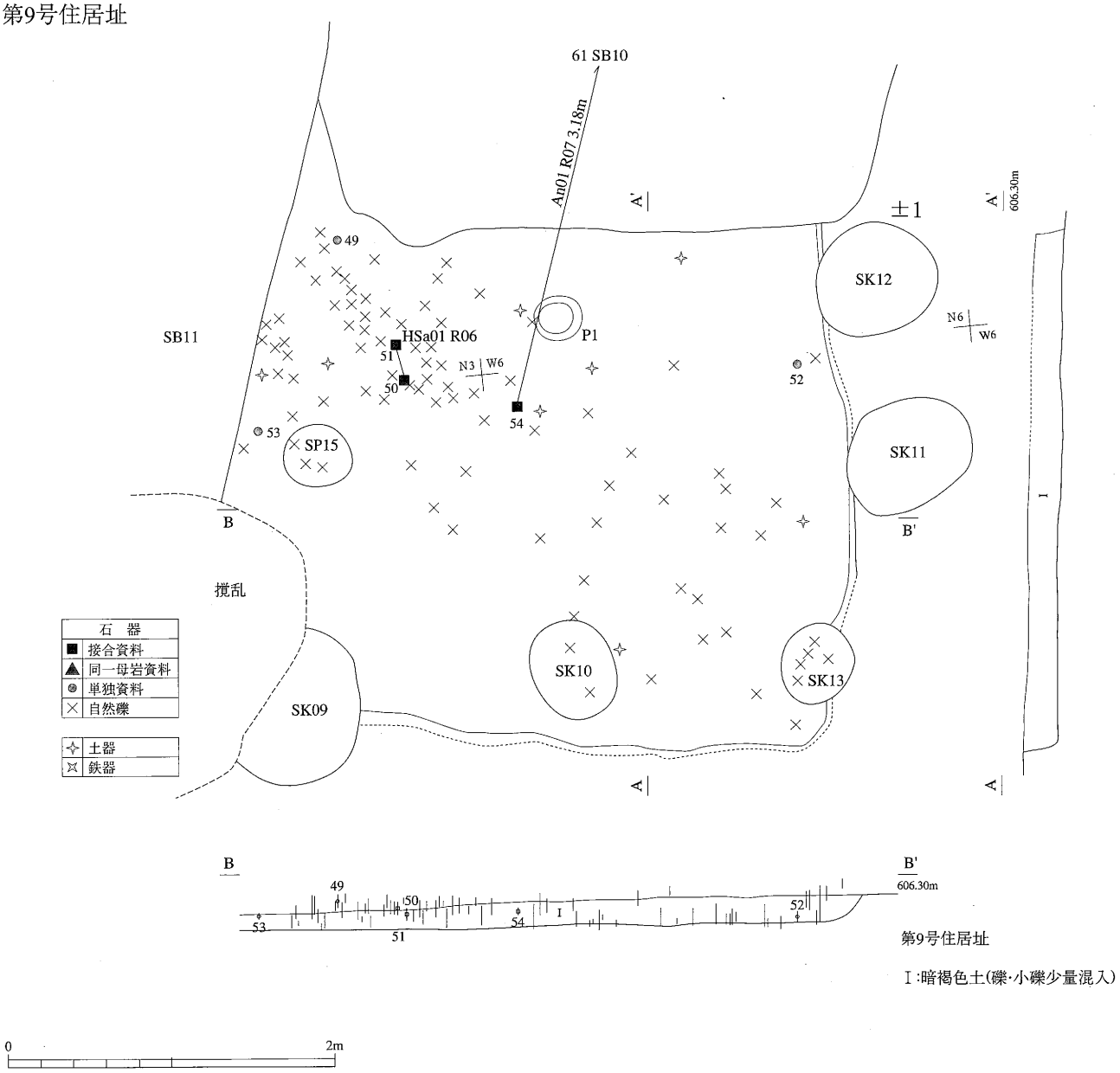
Ⅰ:暗褐色土(礫･小礫･炭化物粒少量混入)
Ⅱ:暗褐色土(小礫少量混入)





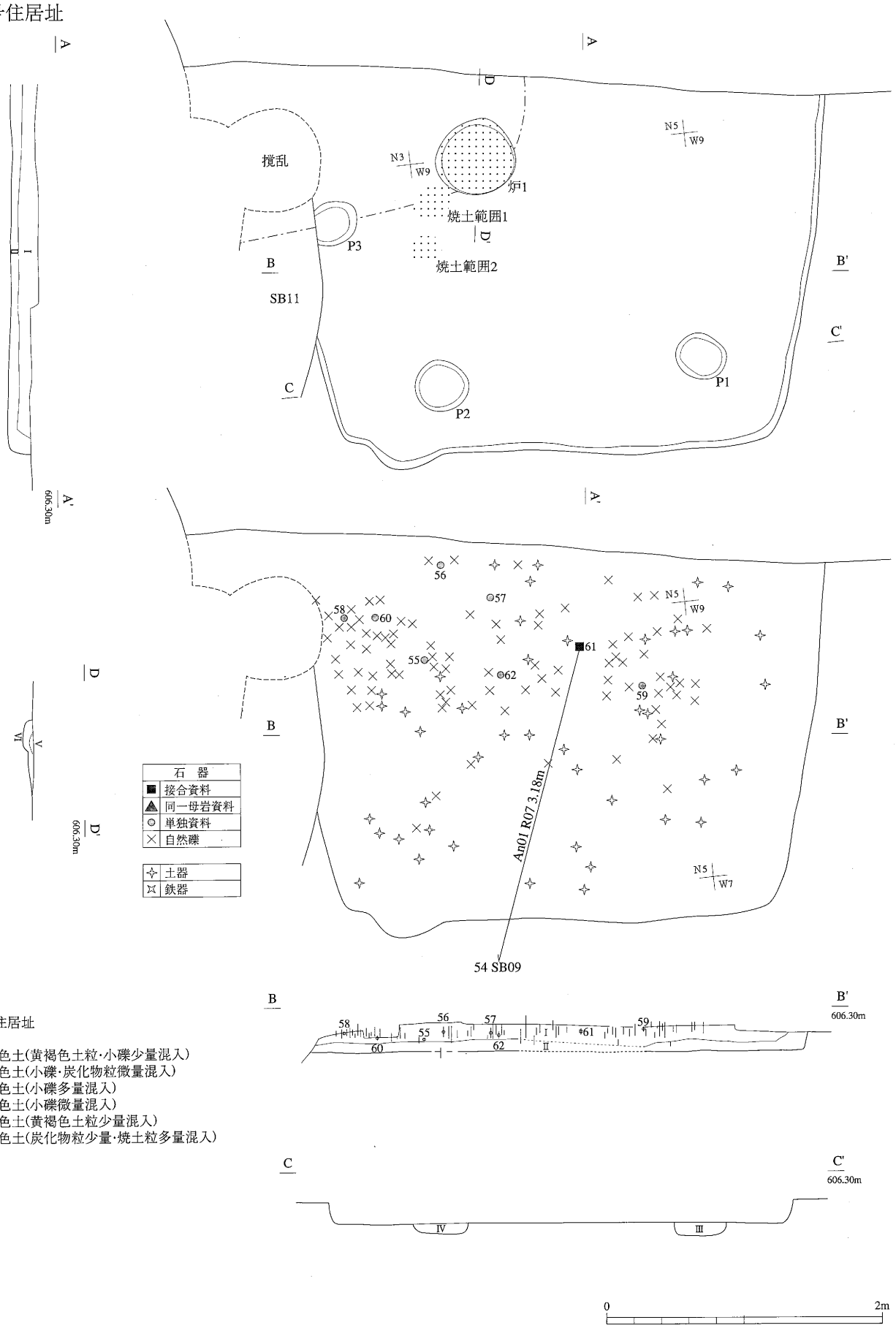
第7図　出土遺構(その3)

第9号住居址



第8図　出土遺構(その4)

第10号住居址

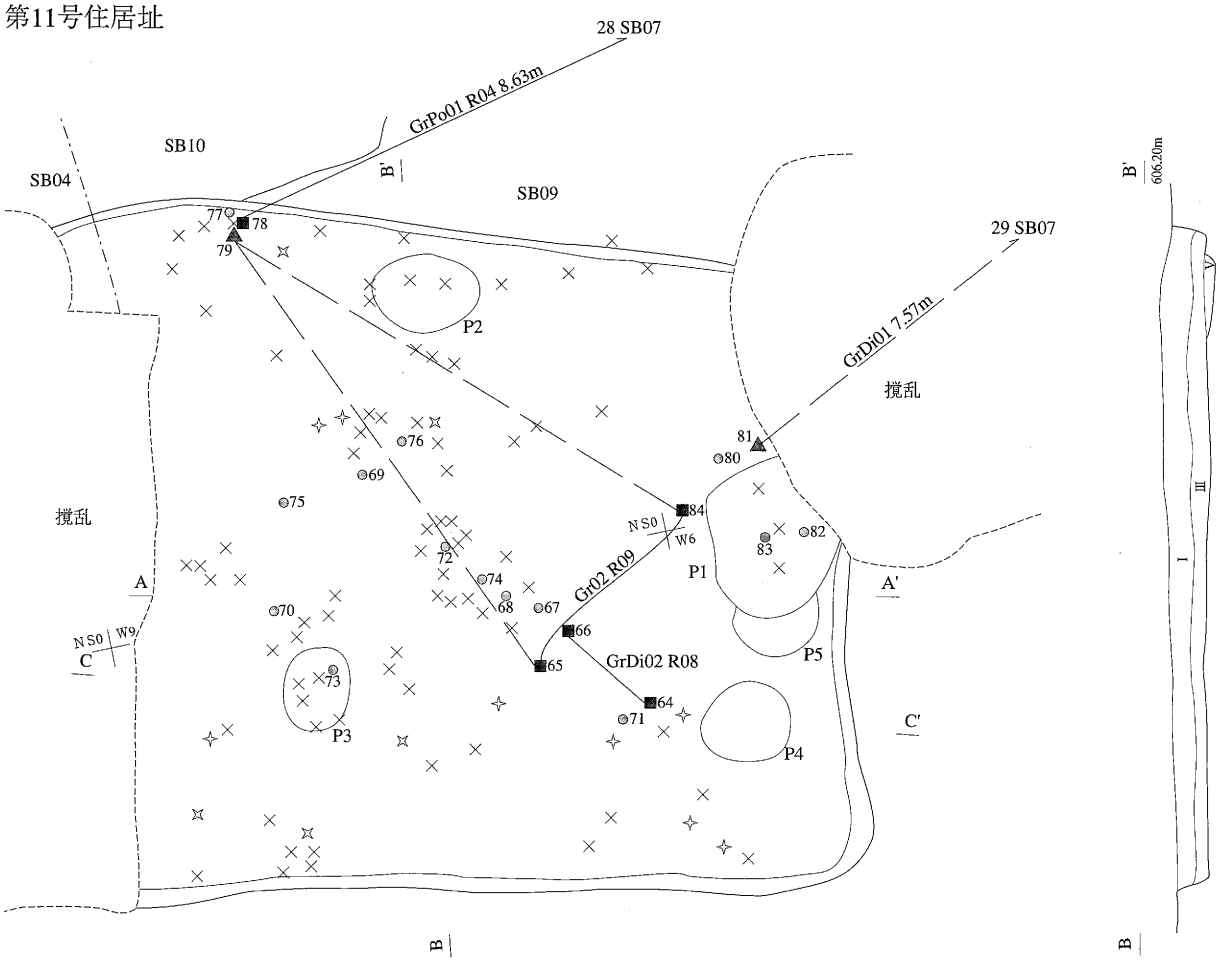


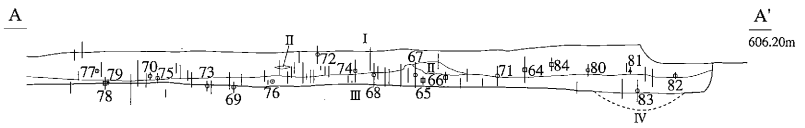
第10号住居址

Ⅰ:暗褐色土(黄褐色土粒・小礫少量混入)
Ⅱ:暗褐色土(小礫・炭化物粒微量混入)
Ⅲ:暗褐色土(小礫多量混入)
Ⅳ:暗褐色土(小礫微量混入)
Ⅴ:暗褐色土(黄褐色土粒少量混入)
Ⅵ:暗褐色土(炭化物粒少量・焼土粒多量混入)

第9図　出土遺構(その5)

第11号住居址





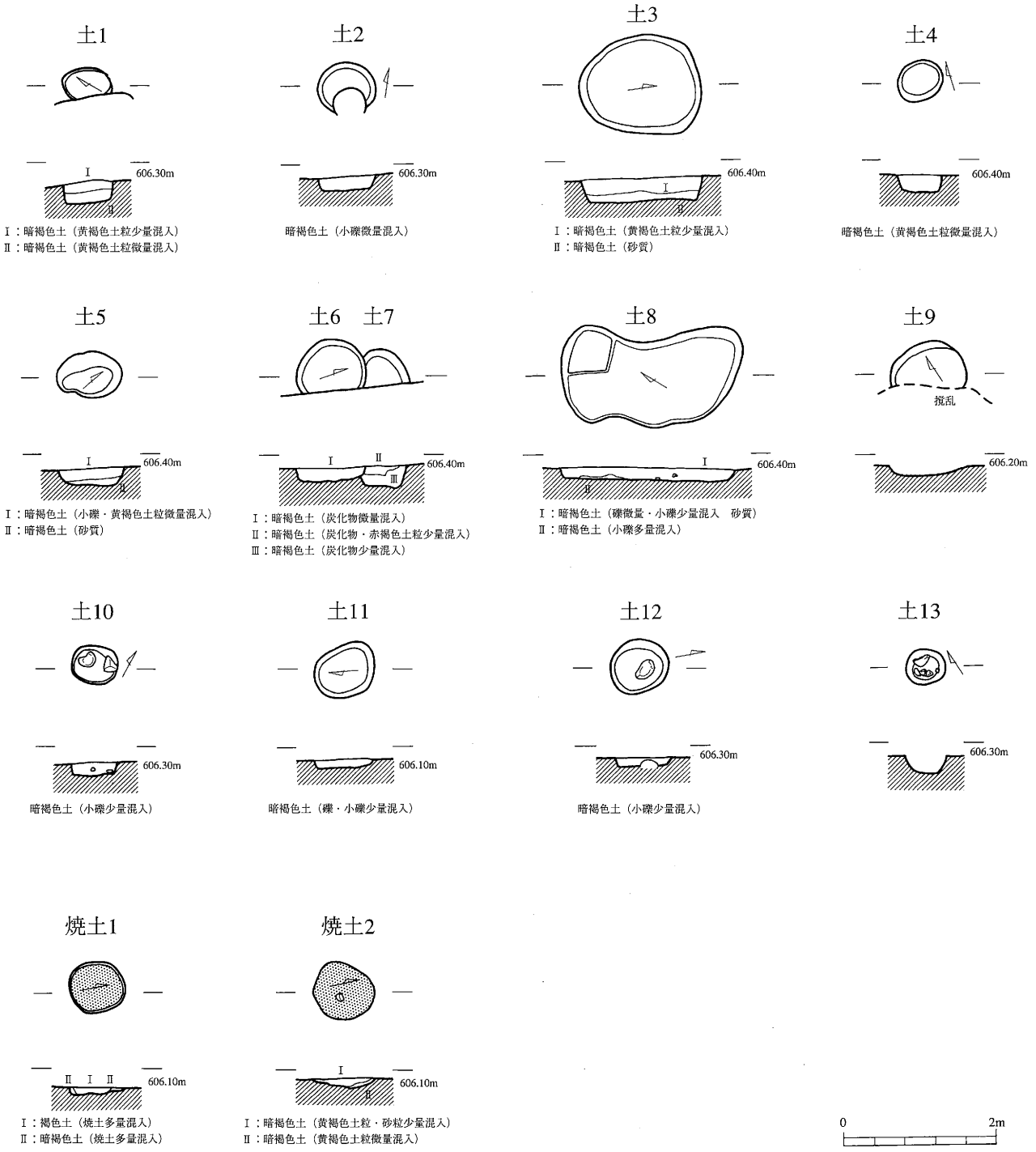
石　器	
■	接合資料
▲	同一母岩資料
●	単独資料
×	自然礫

✧	土器
⌘	鉄器

第11号住居址

Ⅰ:暗褐色土(黄褐色土粒･小礫少量、炭化物粒微量混入)
Ⅱ:暗褐色土(炭化物粒･焼土粒少量混入)
Ⅲ:暗褐色土(炭化物粒微量混入)
Ⅳ:暗褐色土(黄褐色土塊･炭化物粒多量、焼土粒少量混入)
Ⅴ:暗褐色土(砂質　30㎜大の礫少量混入)
Ⅵ:暗褐色土(砂質)
Ⅶ:暗褐色土(黄褐色土粒多量･炭化物粒少量混入)
Ⅷ:黄褐色土(砂質　炭化物粒微量混入)

第10図　出土遺構(その6)



第11図　出土遺構（その7）

V　遺物

1　土器

今回の調査では、古墳時代前期及び平安時代後期の遺物が遺構及び包含層中から出土している。種別としては土師器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。以下、時期ごとに土器群を概観したい。なお、以下の記述にあたって、編年観・器種分類等については、古墳時代の土器群は島田哲男・直井雅尚氏による中信地方の編年案（註1）に、また平安時代の土器群は小平和夫氏による編年案（註2）に従った。

なお、第3・4号住居跡については出土量が少なく、図示できる遺物もなかった。土器群の様相が把握できなかったため、帰属時期も不明である。

①　古墳時代の土器

今回の調査では、第2・5・9・10号住居址及び包含層中から古墳時代前期の土器が出土している。このなかで、第2・第5号住居址は、検出段階で遺構の範囲が把握できなかったため、当初は包含層として掘削を行っており、今回両住居址出土として図示した土器には、包含層出土として取り上げたものを、整理段階でその平面的な位置から両遺構に帰属させたものもある。

器種は、壺・甕・蓋・小型丸底鉢・小型丸底壺・坏・高坏・器台が認められる。

壺　口縁部の確認できたものでは有段壺（壺Ａ）がみられたのみ（21・25・42など）。有段口縁の断面形態は、段より上が外に開く形態のもので、段の部分に刻みを持つもの（42）も見られる。胴部は球胴で、頸部は直線的に開く（43・44）。

甕　く字口縁で球胴の甕（19・37・57など）とS字状口縁の台付甕（33・58）の2者があり、前者が主体となるようである。ともに外面はハケ調整である。く字口縁甕は、口径が20cmを超えるもの（甕Ａ）と、12cm前後の小型甕（甕Ｂ）とがある。底部は確認できたものはすべて平底である。

蓋　類例がないが、17を蓋と判断した。上半のつまみ部は中実の円柱状で、ここから口縁部が直線的に開く。内面は放射状のハケ調整がなされている。

小型丸底鉢　全形のわかるものがなく、胴部のみであるが、小型丸底壺に比し、胴部が扁平であり、頸部がそれほど縮約しないことから小型丸底鉢と判断した（2・4）。

小型丸底壺　全体のわかるものはなかった。口縁部は直線的に開く形態のもの（22・55など）。口径、胴部最大径とも10cm前後のようである。

坏　1点確認できたのみ（45）。半球状の器形で、口縁部が内湾し、口縁端部は円く納められている。

高坏　全体のわかるものはなく、坏部のみもしくは脚部のみのものであった。坏部はいずれも胴部と底部の境に明瞭な稜を有し、外に開く形態のもの（6・7・13など）。脚部は円錐形のもの（8・12・14など）、脚柱部をもって二段成形の脚をもつもの（10・11）、中実の脚部の先に円錐形に開く脚部がつくもの（27）の３者があるようである。脚部の透かし穴は、3単位と4単位のものがある。なお中実の脚のもの（27）は、岡田町遺跡第1次調査地点第2014号住居址に類例があるものの、量的には少なく、また在地の系譜を引くものではなさそうである。

器台　器受部が稜をもって外反するもの（1・31）と、直線的あるいはやや内湾気味に開くもの（32・39）とがあり、ともに台部は外反気味に開く円錐形である。底面に台部への貫通孔がある。台部の透かし穴は３単位のものと４単位のものとがある。

土器群の全体的な特徴として、古墳時代前期に特徴的な器種に加え、小型丸底壺及び脚柱部をもって二段成形のいわゆる屈折脚高坏が存在していることがあげられる。こうした特徴から、古墳時代前期末に位置づけられる土器群といえよう。なかでも第10号住居址の土器群は古墳時代前期末の様相をよく示している良好

な資料といえよう。市内遺跡の該期土器群の類例としては、岡田町遺跡第0032号住居址・白神場遺跡第2号住居址・向畑遺跡第1号住居址の出土土器群がある。

② 平安時代の土器

今回の調査では、第1・7・11号住居址から該期土器群が出土している。いずれも平安時代後期のもので、10世紀後半～11世紀に位置づけられる。以下、遺構ごとに概観する。

第1号住居址出土土器群

15点を図示。提示できたものは食器に偏っているが、土師器坏AⅡ・AⅢ、灰釉陶器椀がある。土師器坏は小型のAⅡと大型のAⅢとが明瞭に分化している。小型のAⅡは口径9.3～10.6cm、器高2.2～2.4cm、AⅢは口径12.4～14.9cm、器高4.9cmを測る。灰釉陶器椀は腰の張るいわゆる深椀で、大小がある。椀の底部付近外面は、回転ヘラケズリ調整が省略され、ロクロナデのままのものや、底面が回転糸切り未調整のままのものも見られる。以上から13～14期に帰属するものと考えられる。

第7号住居址出土土器群

17点を図示。食器に土師器坏AⅡ・黒色土器A坏・椀、灰釉陶器椀・皿が、煮炊き具に土師器羽釜が、貯蔵具に灰釉陶器広口瓶がある。小片のため図示できなかったが、緑釉陶器椀も出土している。土師器坏はいずれも小型で口径のわりに器高のある形態のもので、未だ大小に分化していない時期のものと思われる。口径は9.4～10.6cm、器高は3.0～3.2cmを測る。78は黒色土器A坏としたが、外面の摩滅が著しく、黒色土器Bの可能性もある。ただ、椀の高台部が剥落したものではないようである。黒色土器A坏とすれば他の土器群に組成するとは考えにくい。灰釉陶器椀は腰の張る深椀と、腰の張らないものの双方が見られる。灰釉陶器皿はある程度安定して組成しているようである。食器の様相及び羽釜が出現していることから11期に帰属するものであろう。

第11号住居址出土土器群

9点を図示。いずれも食器で土師器坏AⅢ・椀、黒色土器A椀、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀がある。土師器坏は口径13.3～16.3cmを測る。灰釉陶器椀は腰の張る深椀の形態のもので、内面に沈線のあるものも見られる。緑釉陶器椀は、胎土が硬質でヘラミガキは施されていない。12～13期に帰属するものと考えられる。

註1　冨沢一明ほか　「長野県における古墳時代中期の土器様相－屈折脚高坏の出現から消滅までの予察－」　『東国土器研究』第5号

註2　小平和夫　1990　「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内1－総論編』

2　金属器

15点を図示。全て鉄製品で、遺構出土で帰属時期のわかるものは全て平安時代後期である。器種は刀子・釘・鋏・鎌がある。

・刀子　1点出土。先端部で、刃部に向かって湾曲し、反らない。

・釘　8点出土。全体のわかるものはなく、頭部もしくは脚部を欠損する。1・2は断面がやや扁平である。

・鋏　1点出土。先端を欠損する。幅3.4cm、高さは現存長で5.8cmを計る。

・鎌　1点出土。基部と刃部の一部が残存する。基部は幅がそれほど増幅せず、細長い形態で、刃部幅もそれほど広いものではないようである。

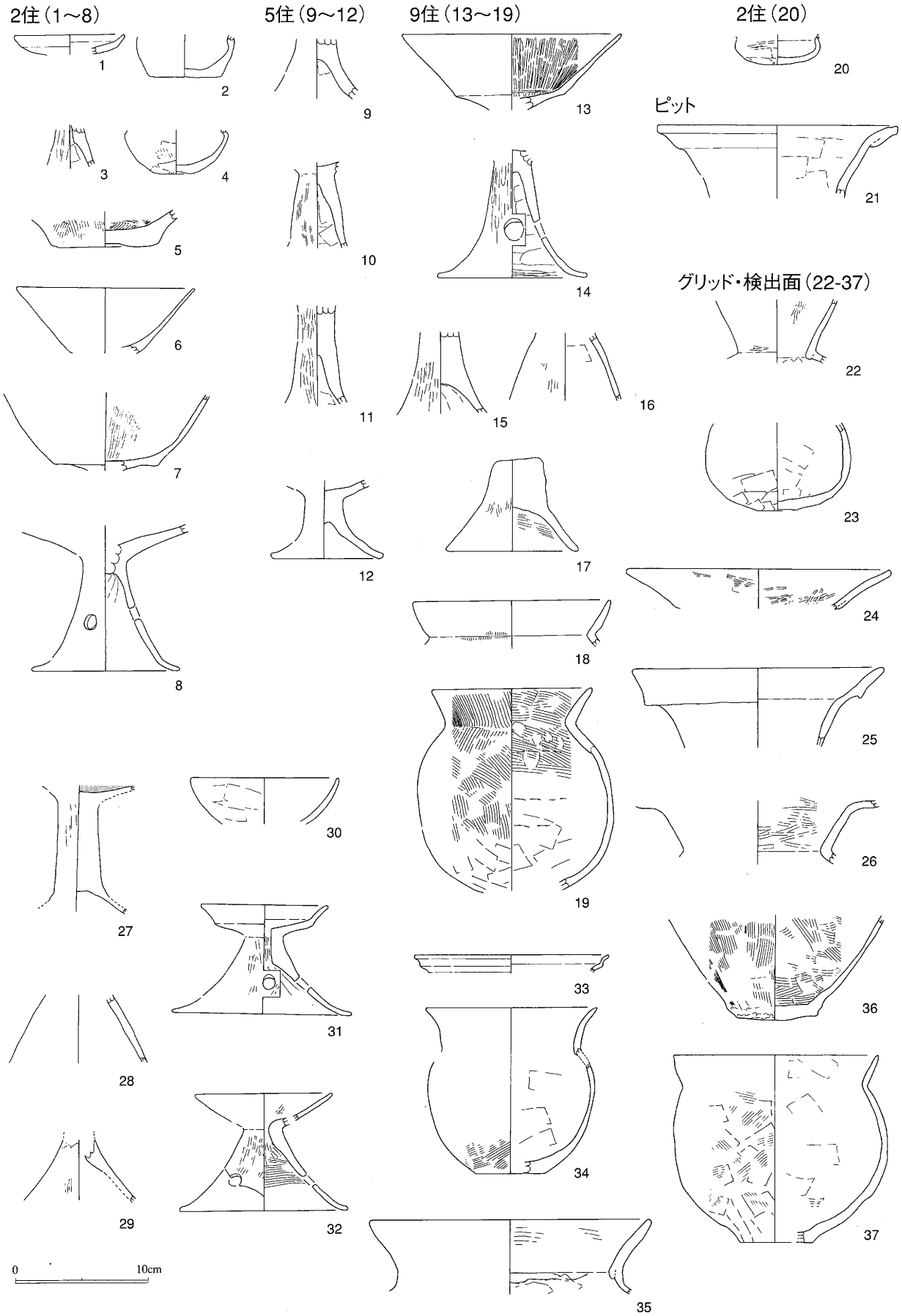
・不明品　3は四角錐状を呈しており、何らかの工具であろうか。13は断面が長方形で、先端は尖っている。釘にしては断面が扁平であり、長い。14は断面が台形状を呈し、中央に透かし穴がある。飾金具の一種か。

第3表　出土土器一覧

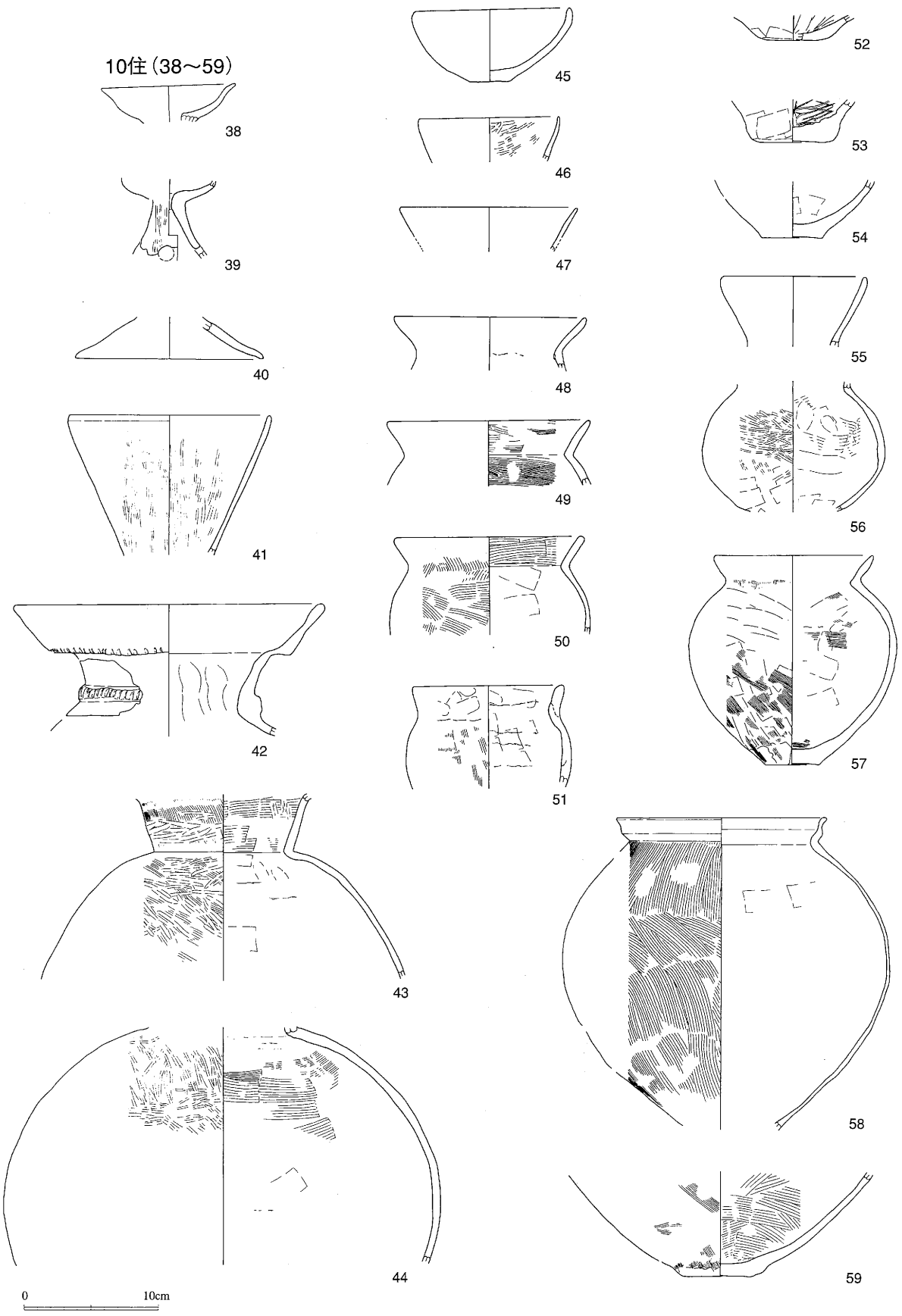
No.	出土地点	種別	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
1	2住	土師	器台型土器	(8.4)			1/8		褐	褐	内外ともミガキ摩滅　口縁部ヨコナデ
2	2住	土師	小型丸底鉢		(5.2)				淡褐～淡灰褐	褐	内外とも摩滅
3	2住	土師	高坏						暗褐	暗褐	外面ミガキ摩滅　内面穿孔後工具ナデ
4	2住	土師	小型丸底鉢		(2.1)			完	褐～黒褐	暗灰褐	外面ケズリ後ミガキ
5	2住	土師	甕		(8.5)		1/4		暗褐～灰褐	暗褐	内外面ハケ　底面ナデ
6	2住	土師	高坏？	(13.5)			1/9		褐～淡灰褐	褐～黒褐	外面ミガキ摩滅　内面摩滅
7	2住	土師	高坏						茶褐	褐～暗灰褐	外面摩滅　内面ミガキ摩滅
8	2住	土師	高坏		(11.2)				褐～暗褐	灰褐	外面ミガキ摩滅　坏部内面ミガキ摩滅脚部内面工具ナデ
9	5住	土師	高坏						黄褐～茶褐	灰褐～褐	外面ミガキ摩滅　内面工具ナデ
10	5住	土師	高坏						暗褐	暗褐	外面工具ナデ後ミガキ　内面坏部ミガキ　脚部工具ナデ
11	5住	土師	高坏						淡褐～褐	暗褐	外面ミガキ　内面工具ナデ
12	5住	土師	高坏		(8.5)		1/8		淡褐～褐	淡褐	外面ミガキ摩滅　坏部内面ナデ　脚部内面工具ナデ
13	9住	土師	高坏	(16.5)			3/4		褐	褐	外面ミガキ摩滅　内面放射状のナデ
14	9住	土師	高坏		(11.4)			1/4	暗橙褐	暗橙褐	外面ミガキ摩滅　内面ヨコナデ　透かし穴3単位
15	9住	土師	高坏						褐～暗褐	暗褐	外面ミガキ摩滅　内面ナデ
16	9住	土師	高坏						褐～暗褐	褐	外面ミガキ摩滅　内面工具ナデ
17	9住	土師	蓋	(9.4)		7.1	1/8		淡褐～黒	暗褐～黒	外面ナデ　内面放射状のハケ
18	9住	土師	甕	(15.0)			1/20		淡褐～褐	淡褐～褐	口縁部内外面ヨコナデ　胴部外面ハケ内面ナデ
19	9住	土師	甕	(11.1)			2/3		褐～灰褐	褐	外面ハケ　内面口縁部付近ハケ　以下工具ナデ
20	2住	土師	小型丸底鉢		2.0			完	褐～暗褐	褐	外面ケズリ後ミガキ　内面ナデ
21	ピット5	土師	壺	(18.1)			3/4		淡褐～灰褐	褐～暗褐	外面ミガキ摩滅　内面工具ナデ
22	トレンチ	土師	壺						暗褐	暗褐	外面ミガキ摩滅　内面頸部ミガキ胴部ナデ
23	グリッド	土師	小型丸底壺		3.9			完	褐～灰褐	褐～灰褐	外面下半ヘラケズリ　上半摩滅　内面粗い工具ナデ一部ケズリ状
24	グリッド	土師	甕	(20.0)			1/8		淡褐～灰褐	淡褐～黒褐	外面ハケ　内面ミガキ
25	グリッド	土師	壺	(19.0)			2/3		褐	褐～灰褐	内外面ともナデ摩滅
26	検出面	土師	壺						褐～暗褐	褐～暗褐	外面ミガキ摩滅　内面頸部ミガキ胴部ナデ
27	グリッド	土師	高坏						茶褐	褐～暗褐	内外とも摩滅　外面赤彩　脚部内面剥落著しい
28	トレンチ	土師	高坏						淡褐	淡褐	内外面とも摩滅
29	グリッド	土師	高坏						褐～暗褐	褐～暗褐	外面ミガキ摩滅　内面ナデ
30	グリッド	土師	坏	(11.2)			1/8		褐～灰褐	褐～暗褐	外面工具ナデ　内面ミガキ摩滅か
31	グリッド	土師	器台	(9.6)	(18.6)	8.3	1/4	わずか	褐～暗褐	褐～暗褐	坏部外面ミガキ内面ミガキ摩滅か　坏部外面ミガキ内面工具ナデ　透かし穴4単位
32	グリッド	土師	器台	(10.4)	(6.8)	(8.8)	1/8	1/4	茶褐	茶褐	坏部内外面摩滅　脚部外面ハケ後ミガキ　内面ハケ
33	検出面	土師	甕	(14.8)			1/14		淡灰褐～灰褐	淡灰褐	内外面ともヨコナデ
34	グリッド	土師	甕	(13.0)	(5.2)	(12.5)	1/8	1/3	淡褐～暗灰褐	淡褐～暗灰褐	口縁部内外面摩滅　胴部外面ハケ内面工具ナデ

No.	出土地点	種別	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
35	グリッド	土師	甕	(23.4)			1/8		淡灰褐～灰褐	褐	外面工具ナデ　内面口縁部ハケ目摩滅　胴部工具ナデ
36	グリッド	土師	甕		7.3			完	淡褐～淡灰褐	淡褐～灰褐	内外面ハケ　底面粗いナデ
37	グリッド	土師	甕	(15.6)	(5.5)	14.2	1/4	一部	暗褐～灰褐	褐～灰褐	外面ヘラケズリ後ナデ　内面工具ナデ
38	10住	土師	器台	(10.0)			1/4		淡褐	淡褐	内外面ともナデ
39	10住	土師	器台						淡褐～淡灰褐	淡褐～淡灰褐	器受部内外面摩滅　脚部外面ミガキ摩滅　内面工具ナデ
40	10住	土師	高坏		(14.0)			1/4	褐	褐	外面ナデ　内面ナデ一部ミガキ状
41	10住	土師	壺	(15.2)			1/4		褐	名褐	外面ミガキ摩滅　内面ミガキ
42	10住	土師	壺	(23.3)			2/3		淡褐～灰褐	淡褐～暗灰褐	内外面ともナデ　口縁段部と頸部の突帯状に刻み
43	10住	土師	壺						褐～灰褐	褐	頸部外面ハケ後ミガキ状のナデ内面ハケ後ミガキ摩滅　胴部外面ハケ後粗いミガキ　内面工具ナデ
44	10住	土師	壺						淡褐～黒褐	淡褐～灰褐	外面ミガキ摩滅　内面ハケ
45	10住	土師	坏	(11.7)	3.1	5.4	7/8	完	淡褐一部黒変	淡褐	内外面ナデ
46	10住	土師	小型丸底壺	(10.6)			1/5		淡褐～淡灰褐	褐～淡灰褐	外面ミガキ摩滅　内面ミガキ
47	10住	土師	高坏？	(13.3)			1/8		褐～黒褐	褐	内外面とも著しく摩滅
48	10住	土師	小型甕	(14.4)			1/5		暗褐～灰褐	暗褐	内外面ともナデ摩滅
49	10住	土師	甕	(15.2)			1/4		淡褐～暗褐	暗褐	外面ナデ　内面ハケ
50	10住	土師	小型甕	(14.2)			完		淡褐～赤褐	淡灰褐～暗灰褐	口縁部外面ナデ内面ハケ　胴部外面ハケ内面工具ナデ
51	10住	土師	小型甕	(11.3)			1/4		淡褐～黒褐	褐～暗褐	口縁部内外面ヨコナデ　胴部外面ハケ　内面工具ナデ
52	10住	土師	壺？		(5.2)			2/5	暗褐	暗褐	内外面ケズリ　底面ナデ
53	10住	土師	壺？		6.2			完	褐～暗褐	褐～暗褐	外面工具ナデ　内面工具先端による深い線条痕　底面ケズリ状のナデ
54	10住	土師	甕		5.2			完	茶褐～黒褐	暗灰褐	外面剥落　内面工具ナデ
55	10住	土師	小型丸底壺	(10.8)			1/4		褐～淡褐	淡褐	内外面ナデ
56	10住	土師	小型丸底壺						褐～灰褐	褐	外面上半ミガキ摩滅ケズリ下半ケズリ　内面上半ハケ・指頭圧痕　下半ナデ
57	10住	土師	小型甕	(11.9)	(6.0)	15.7	1/16	完	茶褐～暗灰褐	褐～暗褐	口縁部内外面ナデ　胴部外面ハケ　底部付近ヘラケズリ後ハケ　内面ハケ
58	10住	土師	台付甕	(15.2)			4/5		淡褐～灰褐	橙褐～灰褐	口縁部内外ヨコナデ　胴部外面ハケ内面工具ナデ
59	10住	土師	甕		6.2			完	褐～暗灰褐	暗褐～暗灰褐	外面ハケ摩滅　内面ハケ　底面ハケ・ナデ
60	1住	土師	坏		3.3			完	明橙褐	明橙褐	内外面ともロクロナデ　底面回転糸切り
61	1住	土師	坏		5.1			完	明橙褐	淡褐	内外面ともロクロナデ　底面回転糸切り
62	1住	土師	坏AⅡ	(9.3)	4.3	2.2	1/3	完	淡褐	明橙褐	内外面ともロクロナデ　底面回転糸切り
63	1住	土師	坏AⅡ	10.0	3.7	2.4	完	完	明橙褐	明橙褐	内外面ともロクロナデ　底面回転糸切り
64	1住	土師	坏AⅢ	(12.4)			1/8		淡褐	淡褐	内外面ともロクロナデ
65	1住	土師	坏AⅢ	(14.4)			1/8		淡褐	淡褐	内外面ともロクロナデ
66	1住	土師	坏AⅢ	(14.9)	5.6	4.9	1/2	完	明橙褐	明橙褐	内外面ともロクロナデ　底面回転糸切り
67	1住	灰釉	椀	(14.8)			1/8		灰白	灰白	
68	1住	灰釉	椀	(15.1)	(7.7)	7.3	3/4	9/10	灰白	灰白	
69	1住	土師	坏AⅡ	(9.7)	4.0	2.1	3/4	完	明橙褐	明橙褐	内外面ともロクロナデ　底面回転糸切り

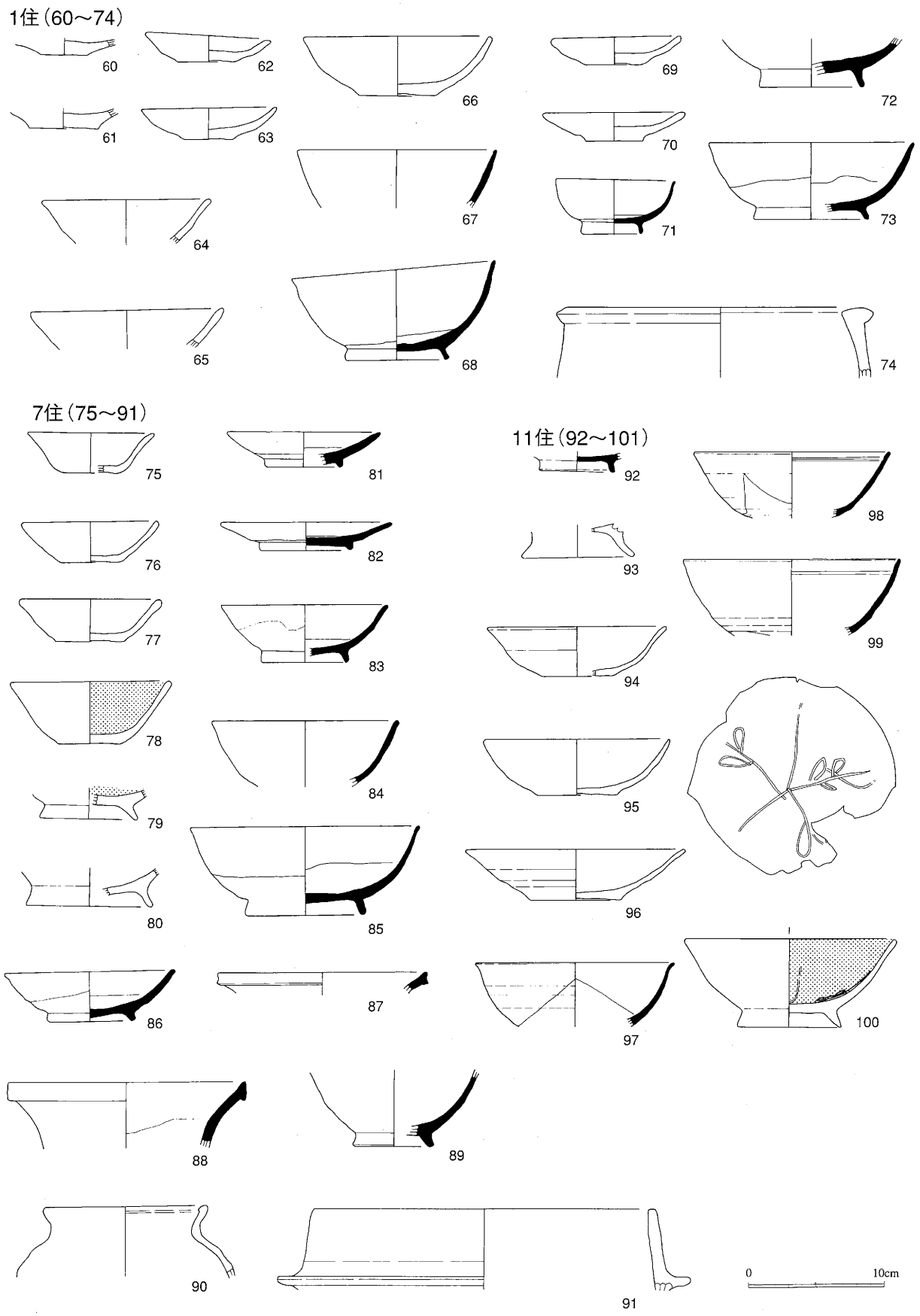
No.	出土地点	種別	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
70	1住	土師	坏AⅡ	(10.6)	4.2	2.1	1/8	完	明橙褐	明橙褐	内外面ともロクロナデ　底面回転糸切り
71	1住	灰釉	椀	(9.0)	4.7	4.1	9/10	完	灰白	灰白	内外面ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面ナデ　漬掛け施釉
72	1住	灰釉	椀		(7.8)			1/5	灰白	暗灰白	内外面ともロクロナデ　付高台後ナデ
73	1住	灰釉	椀	(15.2)	(8.4)	(5.7)	1/3	1/3	灰白	灰白	内外面ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面ナデ　漬掛け施釉
74	1住	土師	甕？	(24.4)				1/12	黒褐	暗褐	外面ヨコナデ　内面ナデ
75	7住	土師	坏AⅡ	(9.4)	(4.0)	3.0	1/4	1/3	明橙褐	明橙褐	内外面ロクロナデ摩滅
76	7住	土師	坏AⅡ	(10.2)	(4.4)	3.0	1/8	2/3	淡褐	明橙褐	内外面ともロクロナデ　底面回転糸切り
77	7住	土師	坏AⅡ	(10.6)	5.0	3.2	1/2	完	明橙褐	明橙褐	内外面ともロクロナデ　底面回転糸切り
78	7住	黒A	椀	12.0	4.6	4.6	完	完	明淡褐	黒	外面ロクロナデ　内面粗いミガキ後黒色処理
79	7住	黒A	椀		(7.2)			1/3	明淡褐	黒	外面ロクロナデ　内面ミガキ後黒色処理摩滅
80	7住	土師	椀		(9.4)			1/5	明淡褐	明淡褐	内外面ともロクロナデ摩滅
81	7住	灰釉	皿	(11.4)	(5.8)	2.6	1/5	1/8	灰白	灰白	内外面ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転ヘラケズリか
82	7住	灰釉	皿	(12.7)	(7.0)	2.1	1/6	3/4	灰白	灰白	内外面ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転糸切り
83	7住	灰釉	椀	(12.4)	(6.6)	4.2	1/6	1/3	灰白	灰白	内外面ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転ヘラケズリ
84	7住	灰釉	椀	(13.9)			1/4		灰白	灰白	内外面ともロクロナデ
85	7住	灰釉	椀	(17.0)	(9.0)	6.6	1/6	2/3	灰白	灰白	内外面ロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転ヘラケズリ　漬掛け施釉
86	7住	灰釉	椀	(12.7)	6.6	3.7	5/6	完	黄灰～明紫褐	暗黄灰～明紫褐	内外面ロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転ヘラケズリ　漬掛け施釉
87	7住	灰釉	広口瓶	(15.6)				1/9	灰白	灰白	ロクロナデ　内外面とも施釉
88	7住	灰釉	広口瓶	(17.6)				1/6	灰白	灰白	内外面ロクロナデ　内面ハケ塗り施釉
89	7住	灰釉	広口瓶？		(6.0)			1/6	灰白	灰白	内外面ナデ　付高台後ナデ
90	7住	土師	甕	(12.2)			1/6		明淡赤褐	明淡褐	内外面ともナデ
91	7住	土師	羽釜	(25.4)				一部	明黄褐	明黄褐	外面ナデ　鍔貼り付け後ナデ
92	11住	緑釉	椀		5.7			完	淡灰褐	淡灰褐	坏部内面ロクロナデ　底面回転ヘラケズリ　付高台後ナデ　内外面及び底面に釉付着　釉調深緑　内面に三叉トチン痕あり
93	11住	土師	椀？		(8.4)			一部	暗褐～褐	暗褐～灰褐	付高台後ナデ　坏部内面ロクロナデ
94	11住	土師	坏	(13.3)	(4.5)	3.7	1/4	1/4	淡灰褐～暗褐	淡灰褐～暗褐	内外面ともロクロナデ　底部回転糸切り
95	11住	土師	坏	(13.8)	(6.0)	4.2	1/3	3/5	褐～灰褐	褐～灰褐	内外面ともロクロナデ　底部回転糸切り
96	11住	土師	坏	(16.3)	(6.9)	3.8	1/4	完	橙褐～灰褐	橙褐～暗灰褐	内外面ともロクロナデ　底部回転糸切り
97	11住	灰釉	椀	(14.8)			1/10		淡灰～淡黄灰	淡灰～淡黄灰	内外面ロクロナデ　漬掛け施釉
98	11住	灰釉	椀	(14.5)			1/16		淡灰	淡灰	内外面ロクロナデ　漬掛け施釉　内面に沈線
99	11住	灰釉	椀	(16.0)			1/2		淡灰白	淡灰	内外面ロクロナデ　外面底部付近回転ヘラケズリ　ハケ塗り施釉　内面に沈線
100	11住	黒A	椀	(15.7)	(7.8)	6.6	1/3	1/5	橙褐～黒褐	黒	内面横ミガキ底面縦ミガキ後黒色処理　外面摩滅　付高台後ナデ　底面回転糸切り後ナデ



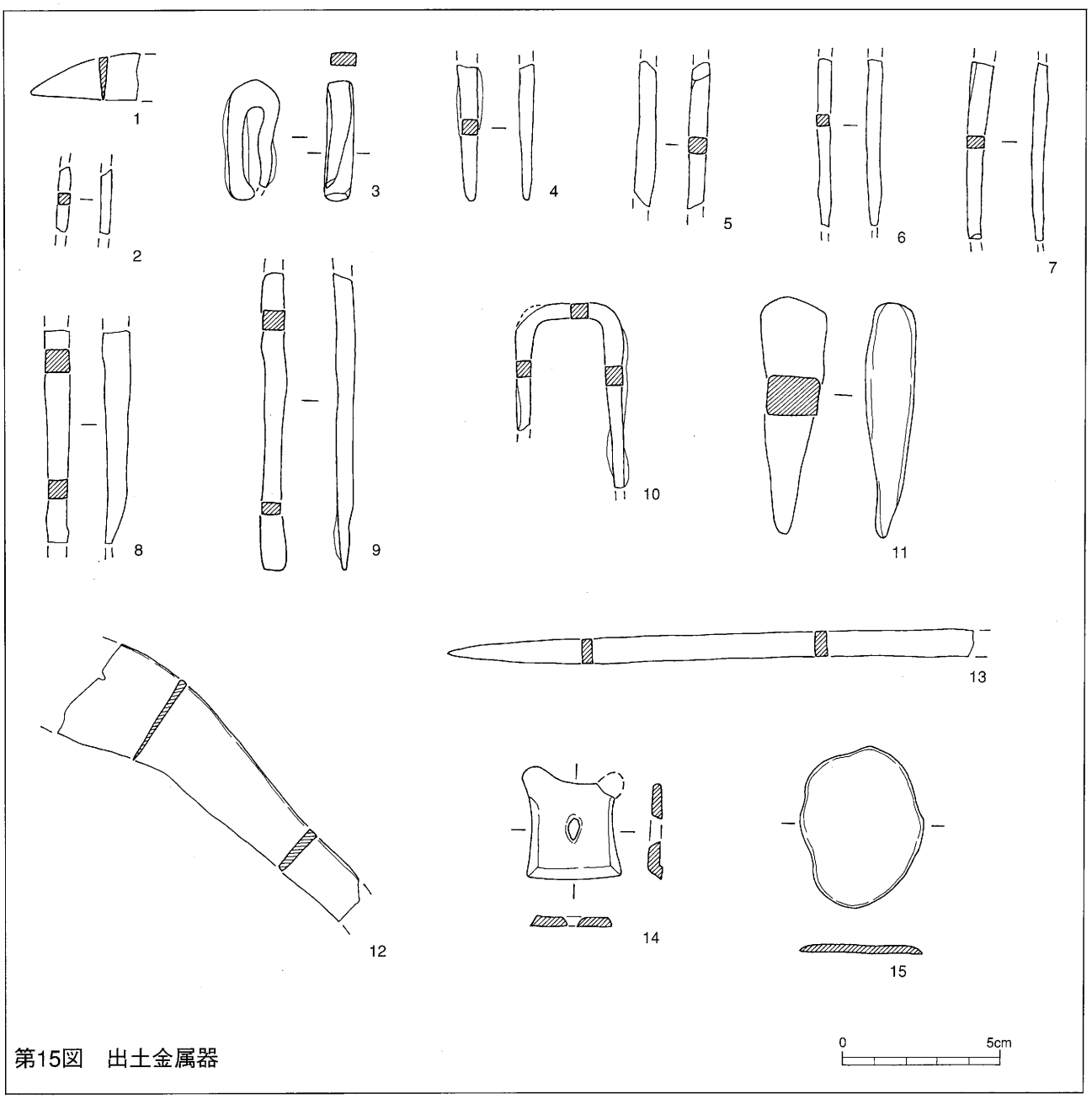
第12図　出土土器（その1）



第13図　出土土器（その2）



第14図　出土土器（その3）



第15図　出土金属器

第4表　出土金属器一覧

No.	器種	出土地点	重量（g）	形態・形状、残存状況及び計測値（mm）
1	刀子	グリッド	3.3	先端部。刃部に向かって湾曲し、反らない。
2	釘	11住	0.9	頭部・脚部欠損。
3	釘？	1住	10.1	釘が曲がったものか？頭部は残存する。
4	釘	グリッド	4.5	頭部欠損。
5	釘	検出面	4.1	頭部・脚部欠損。
6	釘	8住	4.9	頭部・脚部欠損。
7	釘	11住	5.0	頭部・脚部欠損。
8	釘	1住	13.5	先端部断面はやや扁平。
9	釘？	1住	12.0	先端部断面はやや扁平。
10	鎹	11住	10.9	脚部欠損。
11	不明	1住	48.8	先端に向かって四角錐状に尖る。
12	鎌	11住	26.5	刃部・茎部欠損。
13	不明	グリッド	20.4	
14	不明	検出面	15.7	
15	不明	11住	15.4	

3　石器

1.石器群の概要

岡の宮遺跡第1次調査では総点数88点、総重量171,398.1gの石器が回収された。石器は全体の98%にあたる86点が住居址内に分布しており、共伴した土器の型式からは古墳時代前期末に帰属すると考えられる一群(SB02,SB05,SB09,SB10)と、古代11～14期に帰属すると考えられる一群(SB01,SB07,SB11)の二群に、大まかに分離し得る。SB02,SB05を除いては石器の認定基準及び回収基準は「人為·自然為を問わず割れている可能性のある個体」とされ、この基準に適合すると判断された個体はすべて回収された。三次元座標記録率も90%と非常に高く、石器回収率もSB02,SB05を除いては100%に近いものと考えられる(註1)。岡の宮遺跡石器群に対し接合·母岩識別作業を実施した結果、接合資料9例19点及び、同一母岩資料4例7点(接合率22%,同一母岩率30%,単独率70%)を確認し得た。遺構間土層対比を実施したところ、土器型式との整合性にも問題は認められず、土器型式のみからでは把握し得ない遺構間の通時的·共時的関係が明らかとなった(註2)。

2.石材概観(第5,8,10表(註3))

全体的には基盤層中に多量に包含される、所謂東山系の火成岩類が圧倒的多数を占める。古墳時代前期末石器群では安山岩、花崗岩、硬砂岩が主体的であり、花崗閃緑岩、花崗斑岩、石英斑岩が副次的に認められる。古代石器群では主体的石材に変化はないが、副次的石材として花崗閃緑岩、花崗斑岩、石英斑岩、石英閃緑岩、閃緑岩、礫質砂岩、凝灰岩が認められ、古墳時代前期末石器群と比較して石材組成がより多様化する。

3.器種概観(第6,8,9表)

剥片1点を除き、ほとんどが炉構築材もしくは竈構築材と考えられる礫片類である。礫片類の中では折れもしくは折り取りの痕跡が認められる礫片1類(PT1)が43点と最多である。次いで自然為によると考えられる剥落の痕跡のみが認められる礫片(PT)が24点、被熱剥落の痕跡のみが認められる礫片2類(PT2)が5点と少なく、PT1とPT2の要素が複合して認められる礫片複合(PTC)が13点出土している。古墳時代と古代の住居址では炉と竈の構造的差異が強調されることが多いようであるが、本遺跡においては、古墳時代前期末石器群と古代石器群の器種組成はほぼ等質的であるといえる。

4.遺構単位石器群概観(第16図(註4),第12表)

SB01石器群(第5図)　調査区南西端において検出された。南半は調査区域外にかかる。竈は検出されなかったものの東部に張り出し部及び、火床と考えられる酸化範囲が認められた。酸化範囲に近接して集中部が認められる他は散漫に分布する。SB01全体での石器含有率は48%、接合率は16.7%であった。

SB02(第5図)　調査区域外にかかる状態で調査区南東端にて検出された。石器は回収されなかった。

SB03(第5図)　調査区域外にかかる状態で調査区南西端にて検出された。石器は全く出土しなかった。

SB04石器群(第6図)調査区西部においてSB09,SB10,SB11に切られる状態で検出された。単独資料、自然礫共に1点ずつが出土した。63の垂直出土位置は切り合うSB09石器群のそれに比してやはり分布域が異なる。

SB05(第6図)　調査区域外にかかる状態で調査区北東端にて検出された。石器は回収されなかった。

SB07石器群(第7図)　調査区北部において検出された。北西部を撹乱に切られる。竈は検出されなかったが、北東部にその痕跡とも考えられる石器の集中部が認められる。平面的には中央部にやや集中しつつ散漫に分布する。垂直分布は中央部が低く、周縁部ほど高い傾向がある。SB11との遺構間接合資料及び遺構間同一母岩資料が1個体ずつ含まれる。SB07全体での石器含有率は28.1%、接合率は22.2%であった。

SB09石器群(第8図)　調査区北西部においてSB10,SB11及び撹乱に切られる状態で検出された。炉址は検出されなかった。平面的には北東部から南西部にかけて帯状に分布する。垂直分布に偏りは認められない。SB10との遺構間接合資料1個体が含まれる。SB09全体での石器含有率は6.4%、接合率は50%であった。

SB10石器群(第9図)　調査区北西部においてSB11に切られる状態で検出された。西半は調査区域外にかかる。炉址は西部において検出された。平面的には中央部に集中して分布する。垂直分布は自然礫2点を除いてはⅠ層上部に集中する。SB09との遺構間接合資料1個体が含まれる。SB10全体での石器含有率は8.4%、接合率は12.5%であった。

SB11石器群(第10図)　調査区北西部において撹乱に切られる状態で検出された。竈は検出されなかった。平面的には全体的に散漫に分布する。垂直分布はⅠ·Ⅱ層には少なく、Ⅲ層に集中する。SB07との遺構間接合資料1個体が含まれる。SB11全体での石器含有率は20.2%、接合率は25%であった。

5.母岩別資料概観(第16図,第11表)

QuPo01(04,06)　SB01の竈の痕跡と考えられる焼土範囲に近接した状態でⅠ層に分布する。不整形礫を素材としており、残存率は約3/4程度である。両個体共に被熱剥落面及び剥離に近い折れ面が複数認められ、それらを変色範囲が切ることから、分離状態でそれぞれ変色したものと考えられる。

Gr01 R01(09+10)　SB01Ⅰ層より近接状態で出土した。扁平礫を素材としており、残存率は約1/2程度である。折れ面接号資料であり、接合面に切られる同一の変色範囲が認められた。

QuPo02 R02(47→16+19)　SB07より出土し、16,19がⅠ層に分布する。47は帰属層準は不明である。棒状礫を素材としており、残存率は約1/2程度である。本石器群中唯一の分離順序が確定する母岩である。まず側面より47が被熱剥落し、その後16と19が剥離に近い折り取りにより分離されている。16,19共に同一の変色範囲が認められ、16には接合面とは別の剥離に近い折れ面を切る変色範囲が認められた。

QuPo03 R03(26+45)　SB07より出土し、26はⅠ層に分布する。45は帰属層準不明である。不整形礫を素材とし、残存率は約1/2程度である。共に変色範囲が認められるが接合面である被熱剥落面に切られている。

GrPo01 R04(28+78)　28がSB07Ⅰ層、78がSB11Ⅲ層に分布する遺構間接合資料である。棒状礫を素材としており、残存率は約1/2程度である。78には接合面である折れ面を切る変色範囲が認められることから、78は分離後に変色したものと考えられる。

GrDi01(29,81)　29がSB07Ⅰ層、81がSB11Ⅰ層に分布する遺構間同一母岩資料である。扁平礫を素材としており、残存率は約1/4程度である。両個体共に変色範囲が認められ、それらを切る剥離面に近い折れ面が複数面認められることから、分離した後に変色したものと考えられる。

QuPo04 R05(31+44)　SB07Ⅰ層より近接状態で出土した。不整形礫を素材とし、残存率は約1/2程度である。接合面である摂理面に沿った剥落面に切られる変色範囲が認められ、分離以前に変色したものと考えられる。

QuPo05(46,48)　SB07南東覆土中より回収された。扁平礫を素材としており、残存率は約1/16程度である。両個体共に礫面にのみ変色範囲が認められ、変色範囲を切る剥離面に近い折れ面が認められた。

HSa01 R06(50+51)　SB09Ⅰ層に分布する。扁平礫を素材としており、残存率は約3/4程度である。剥離面に近い折れ面で接合する。変色範囲は認められなかった。

An01 R07(54+61)　54がSB09Ⅰ層、61がSB10Ⅰ層に分布する遺構間接合資料である。扁平礫を素材としており、残存率は約7/8程度である。54には接合面である剥落面を切る変色範囲が認められる。54,61共に接合面を切る剥落面が認められ、61には敲打痕が認められた。

GrDi02 R08(64+66)　SB11Ⅰ層及びⅢ層に分布する。扁平礫を素材としており、残存率は約1/1程度である。接合面である折れ面が変色範囲を切る。

Gr02 R09(65+84,79)　65,79はSB11Ⅲ層に、84はSB11Ⅰ層に分布する。扁平礫を素材としており、残存率は約1/16程度である。65,84は同一変色範囲を切る折れ面で接合し、最大長約50cmを測る大形の礫片となる。同一面である大きな剥落面には同一の変色範囲が認められた。

6.小結(第17図,第12表)

本項では時空間的に限定された調査区内における、遺構と遺物の関係論としての遺跡構造論的把握を試みた。接合·母岩識別作業からは遺構間接合·同一母岩資料が得られ、遺構間土層対比が可能となった。その結果、これまで不明であった、東山系の火成岩類を竈構築材に用いる遺跡における遺構間接合·同一母岩資料の存在及び、多数の単独資料の存在が明らかとなった。また、これまで回収されなかった古墳時代の炉構築材と考えられる礫片を主体とする石器群においても遺構間接合資料が得られたことは重要な成果といえよう　。

[補註]

註1　SB02及びSB05は調査終了間際に検出された為、遺物出土状況図は作成されず、残念ながら石器の回収もなされ得なかった。

註2　回収された個体にはすべて個体識別番号を与え属性データベースを作成した後、接合·母岩識別作業をおよそ20人日実施した。接合·母岩識別作業は推定帰属時期等の先入観は、最終的な確認段階まで持たない方針で行った。遺物実測図及び遺物写真については諸般の制約から提示を断念した。

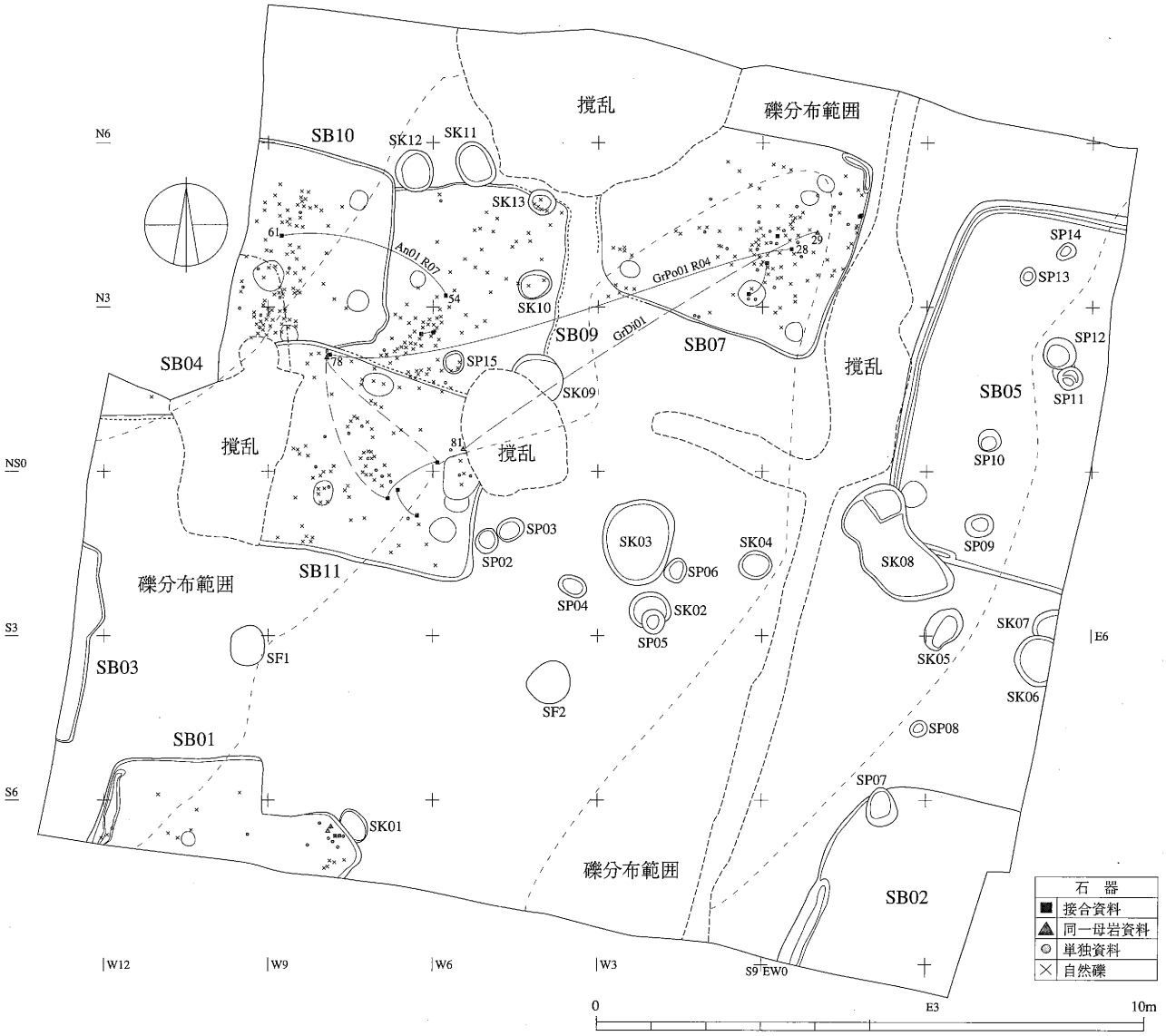
註3　石材鑑定にあたっては森　義直氏より有益な御教唆を頂いた。記して御礼申し上げます。なお、第4～6,9表では石器として取り上げられた自然礫2個体を含めている。また、第8表では石器として取り上げられた自然礫2個体を自然礫に含めている。自然礫も遺構覆土等に含まれる場合は広義の石器といえるものであるが、第8表においては石器から除外して扱っている。すなわち、第8表における石器とは自然礫を除いた広義の石器すべてを指す。

註4　第16図においては、遺構内については石器、自然礫を問わず三次元座標記録の為されたすべての個体をドット化したが、遺構外の自然礫についてはドット化していない。なお、石器含有率は石器個体数/総点数(自然礫含む)、接合率は接合個体数/石器個体数として算出した。

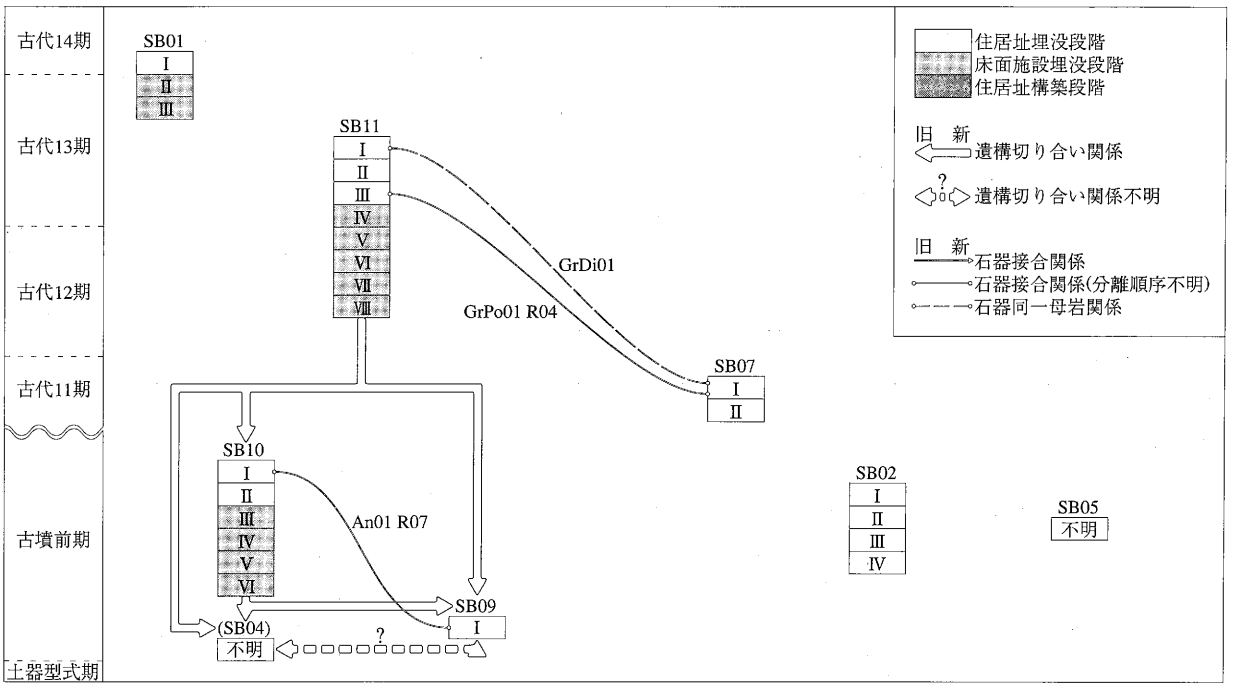
註5　竈の存在しない時期の石器群においても炉構築材を含む礫片等を回収基準を明示した上で回収することにより、石器の遺構間接合·同一母岩関係から遺構間土層対比が可能となるものと考えられる。さらに、剥片を素材とする石器が主体を成す石器群(縄文·弥生石器群等)に対して遺構間土層対比を実施した場合、剥片の分離順序が確定する母岩が多いものと考えられ、より一層の成果が期待される。なお、本項において用いた記号及び略号等は平瀬遺跡Ⅱ報告書に準拠している(太田 2000)。凡例等はそちらを参照して頂きたい。

[主要引用·参考文献]

太田圭郁　2000「石器」『平瀬遺跡Ⅱ』松本市教育委員会 pp93～pp122



第16図　母岩別資料分布図



第17図　遺構間土層対比模式図

石材略号	石材名
Ob	黒耀岩
Rh	流紋岩
BAn	黒色緻密安山岩
An	安山岩
Do	粗粒玄武岩
TuBr	凝灰角礫岩
CrAs	溶質凝灰岩
GrDi	花崗閃緑岩
QuDi	石英閃緑岩
Di	閃緑岩
GrPo	花崗斑岩
QuPo	石英斑岩
Gr	花崗岩
Po	玢岩
Se	蛇紋岩
Co	礫岩
CoSa	礫質砂岩
TuSa	凝灰質砂岩
CGHSa	粗粒硬砂岩
FGHSa	細粒硬砂岩
HSa	硬砂岩
Sa	砂岩
SiMu	珪質泥岩
Mu	泥岩
SaSh	砂質頁岩
SiSh	珪質頁岩
Sh	頁岩
SiTu	珪質凝灰岩
MuTu	泥質凝灰岩
Sc	輝緑凝灰岩
GTu	緑色凝灰岩
MeCGTu	変質粗粒凝灰岩
MeTu	変質凝灰岩
Tu	凝灰岩
SaSl	砂質粘板岩
MeSl	変質粘板岩
Sl	粘板岩
Ch	チャート
Ph	千枚岩
CrSc	結晶片岩
ChSc	緑泥片岩
MiSc	雲母片岩
Ho	ホルンフェルス
BiGn	片麻岩
Qu	石英
Jad	翡翠
Jas	碧玉
Ta	滑石

第5表　石材略号一覧

器種略号	器種名	仮設定義
MS	原石	人為的加工痕が全く認められないものであるが石器の素材と考えられる個体
C	石核	剥離の痕跡としての剥離痕が認められる個体
F	剥片	剥離の痕跡としての剥離面が認められる個体
BC	楔状石核	両極剥離の痕跡としての剥離痕が認められる個体
BF	楔状剥片	両極剥離の痕跡としての剥離面が認められる個体
FP	鏃形石器	押圧剥離により両面が整形され、尖頭部を有する個体
Dr	錐形石器	機能部と考えられる尖頭部の形成された個体
Sp	ヒ形石器	機能部と考えられる刃部及び基部と考えられる抉り部の形成された個体
Sc	スクレイパー状石器	二次加工痕が連続して認められ、刃部と考えられる剥離単位の認められる個体
RF	二次加工ある剥片	二次加工痕が認められる剥片
MF	微細剥離痕ある剥片	微細剥離痕が連続して認められる剥片
FA	打製斧形石器	通常・両極剥離等により側縁もしくは刃部の形成された個体
PA	磨製斧形石器	剥離・敲打・研磨調整により形成された斧形石器
PP	磨製鏃形石器	剥離・敲打・研磨調整により形成された鏃形石器
PK	磨製包丁形石器	剥離・研磨調整により形成された包丁状を呈する個体
P	礫	剥離・剥落・研磨・敲打・折れのいづれの痕跡も認められない、全面が礫面に覆われた個体
PT	礫片	自然為による剥落が認められる個体
PT1	礫片1類	折り取りもしくは折れの痕跡が認められる個体
PT2	礫片2類	被熱により破砕した痕跡が認められる個体
PTC	礫片複合	折り取りもしくは折れの痕跡及び、被熱により破砕した痕跡が複合して認められる個体
P1	礫石器1類	凸面に敲打技術が施されたか、もしくは敲打技術により凸面の形成された個体
P2	礫石器2類	凸面に研磨技術が施されたか、もしくは研磨技術により凸面の形成された個体
P3	礫石器3類	凹面に敲打技術が施されたか、もしくは敲打技術により凹面の形成された個体
PC	礫石器複合	研磨・敲打・剥離技術が複合して認められる個体
Di	皿状石器	研磨技術・敲打技術により凹面の形成された個体
Ws	砥石状石器	平坦面に研磨技術が施されたか、もしくは研磨技術により平坦面の形成された個体
Ac	管状石器	研磨技術により円柱状に形成され、穿孔のなされた個体(所謂管玉,臼玉)
Si	錘状石器1類	主に偏平礫を素材とし、対応する長軸上に研磨・敲打技術により抉り部の形成された個体
KW	錘状石器2類	製作・使用痕跡は認め得ないが出土状況等から石器とした個体(所謂こもで石)
Su	硯形石器	直方体状を呈し研磨調整により平坦面が形成された個体(所謂硯)
Bo	有孔石製品	円盤状を呈し中央部に穿孔のなされた個体(所謂紡錘車)

第6表　器種略号一覧

遺構略号	遺構名
SB	住居址
SD	溝状遺構
SF	焼土範囲
SK	土坑
SP	ピット
SQ	遺物集中範囲
SU	埋甕
SV	自然流路
SX	不明
TG	グリッド
TK	検出面
TT	トレンチ
TY	排土
P	住居址床面ピット

第7表　遺構略号一覧

石材	F	P	PT	PT1	PT2	PTC	計	接合個体数	接合率	石材
An			4	7			11	2	18.2%	An
GrDi		1	3	12	1	1	18	2	11.8%	GrDi
QuDi			3	1		1	5	0	0.0%	QuDi
Di		1	1				2	0	0.0%	Di
GrPo				5		1	6	2	33.3%	GrPo
QuPo	1		1	8	2	8	20	7	35.0%	QuPo
Gr			6	3	1	2	12	4	33.3%	Gr
CoSa			2	1			3	0	0.0%	CoSa
HSa			1	6	1		8	2	25.0%	HSa
Sa			2				2	0	0.0%	Sa
Tu			1				1	0	0.0%	Tu
計	1	2	24	43	5	13	88	19	22.1%	計
石材	F	P	PT	PT1	PT2	PTC	計	接合個体数	接合率	石材

第8表　石材単位器種組成

出土遺構1	F	P	PT	PT1	PT2	PTC	計	出土遺構1
SB01			3	6		3	12	SB01
SB04						1	1	SB04
SB07			8	21	2	5	36	SB07
SB09			1	4	1		6	SB09
SB10	1		4	2	1		8	SB10
SB11		1	6	9	1	4	21	SB11
SK10		1					1	SK10
SK11				1			1	SK11
TG			1				1	TG
TK			1				1	TK
計	1	2	24	43	5	13	88	計
出土遺構1	F	P	PT	PT1	PT2	PTC	計	出土遺構1

第9表　遺構単位器種組成

出土遺構1	An	GrDi	QuDi	Di	GrPo	QuPo	Gr	CoSa	HSa	Sa	Tu	計	出土遺構1
SB01		4				2	3	1	2			12	SB01
SB04					1							1	SB04
SB07	4	5	1	1	4	14	3	2	1		1	36	SB07
SB09	3	1							2			6	SB09
SB10	3					1	3		1			8	SB10
SB11	1	7	3	1	1	3	3		2			21	SB11
SK10		1										1	SK10
SK11			1									1	SK11
TG										1		1	TG
TK										1		1	TK
計	11	18	5	2	6	20	12	3	8	2	1	88	計
出土遺構1	An	GrDi	QuDi	Di	GrPo	QuPo	Gr	CoSa	HSa	Sa	Tu	計	出土遺構1

第10表　遺構単位石材組成

母岩ID	母岩番号	接合番号	ID () 内非接合	出土遺構・層準	接合個体数	総個体数	残存率	重量(g)	遺構切り合い関係	剥離・分割順序
1	QuPo01	-	(04),(06)	04(SB01-Ⅰ),06(SB01-Ⅰ)	0	2	1/2	21,300.0	単一遺構内	-
2	Gr01	R01	09,10	09(SB01-Ⅰ),10(SB01-Ⅰ)	2	2	3/4	5,496.0	単一遺構内	-
3	QuPo02	R02	16,19,47	16(SB07-Ⅰ),19(SB07-Ⅰ),47(SB07-不明)	3	3	1/2	3,230.0	単一遺構内	47→16+19
4	QuPo03	R03	26,45	26(SB07-Ⅰ),45(SB07-不明)	2	2	1/2	6,174.0	単一遺構内	-
5	GrPo01	R04	28,78	28(SB07-Ⅰ),78(SB11-Ⅲ)	2	2	1/1	2,830.0	遺構間切り合い無し	-
6	GrDi01	-	(29),(81)	29(SB07-Ⅰ),81(SB11-Ⅰ)	0	2	1/4	1,108.0	遺構間切り合い無し	-
7	QuPo04	R05	31,44	31(SB07-Ⅰ),44(SB07-Ⅰ)	2	2	1/2	3,839.0	単一遺構内	-
8	QuPo05	-	(46),(48)	46(SB07-不明),48(SB07-不明)	0	2	1/16	286.5	単一遺構内	-
9	HSa01	R06	50,51	50(SB09-Ⅰ),51(SB09-Ⅰ)	2	2	3/4	1,874.0	単一遺構内	-
10	An01	R07	54,61	54(SB09-Ⅰ),61(SB10-Ⅰ)	2	2	7/8	1,150.0	遺構間切り合い無し	-
11	GrDi02	R08	64,66	64(SB11-Ⅰ),66(SB11-Ⅲ)	2	2	1/1	7,277.0	単一遺構内	-
12	Gr02	R09	65,(79),84	65(SB11-Ⅲ),79(SB11-Ⅲ),84(SB11-Ⅰ)	2	3	1/16	1,926.0	単一遺構内	-

第11表　母岩別資料一覧

遺構名	時期	段階	層序	接合資料 点数	接合資料 ID	同一母岩資料 点数	同一母岩資料 ID	単独資料 点数	石器小計	自然礫 点数	総計	石器含有率	接合率
SB01	古代 13～14期	住居址覆土	Ⅰ	2	09·10(Gr01 R01)	2	04·06(QuPo01)	8	12	10	22	54.5%	16.7%
		竈覆土?	Ⅱ	0		0		0	0	1	1	0.0%	
		貼床?	Ⅲ	0		0		0	0	0	0		
		不明	不明	0		0		0	0	2	2	0.0%	
計				2		2		8	12	13	25	48.0%	16.7%
SB02	古墳前期	住居址覆土	Ⅰ	0		0		0	0	0	0		
			Ⅱ	0		0		0	0	0	0		
			Ⅲ	0		0		0	0	0	0		
			Ⅳ	0		0		0	0	0	0		
計				0		0		0	0	0	0		
SB03	不明	不明	断面図無し	0		0		0	0	0	0		
計													
SB04	不明	不明	断面図無し	0		0		1	1	1	2	50.0%	0.0%
計													
SB05	古墳前期	不明	断面図無し	0		0		0	0	0	0		
計													
SB07	古代11期	住居址覆土	Ⅰ	6	16·19(QuPo02 R02),26(QuPo03 R03) 28(GrPo01 R04),31·44(QuPo04 R05)	1	29(GrDi01)	23	30	73	103	29.1%	20.0%
			Ⅱ	0		0		0	0	0	0		
		不明	不明	2	45(QuPo03 R03),47(QuPo02 R02)	2	46·48(QuPo05)	2	6	19	25	24.0%	33.3%
計				8		3		25	36	92	128	28.1%	22.2%
SB09	古墳前期	住居址覆土	Ⅰ	3	50·51(HSa01 R06),54(An01 R07)	0		3	6	64	70	8.6%	50.0%
		不明	不明	0		0		0	0	24	24	0.0%	
計				3		0		3	6	88	94	6.4%	50.0%
SB10	古墳前期	住居址覆土	Ⅰ	1	61(An01 R07)	0		7	8	58	66	12.1%	12.5%
			Ⅱ	0		0		0	0	2	2	0.0%	
		P1覆土	Ⅲ	0		0		0	0	0	0		
		P2覆土	Ⅳ	0		0		0	0	0	0		
			Ⅴ	0		0		0	0	0	0		
		炉1覆土	Ⅵ	0		0		0	0	0	0		
		不明	不明	0		0		0	0	27	27	0.0%	
計				1		0		7	8	87	95	8.4%	12.5%
SB11	古代 12～13期	住居址覆土	Ⅰ	2	64(GrDi02 R08),84(Gr02 R09)	1	81(GrDi01)	8	11	24	35	31.4%	18.2%
			Ⅱ	0		0		0	0	1	1	0.0%	
			Ⅲ	3	65(Gr02 R09),66(GrDi02 R08),78(GrPo01 R04)	1	79(Gr02)	5	9	23	32	28.1%	33.3%
		P1覆土	Ⅳ	0		0		0	0	0	0		
		P2覆土	Ⅴ	0		0		0	0	0	0		
		P3覆土	Ⅵ	0		0		0	0	0	0		
			Ⅶ	0		0		0	0	0	0		
		P4覆土	Ⅷ	0		0		0	0	0	0		
		不明	不明	0		0		0	0	31	31	0.0%	
計				5		2		13	20	79	99	20.2%	25.0%

第12表　遺構·土層単位母岩別資料集計

ID	出土遺構1	出土遺構2	層序	三次元	器種	重量(g)	石材	母岩	接合	備考
01	SB01	No.5	Ⅰ	○	PT	556.0	CoSa	単独		
02	SB01	No.9	Ⅰ	○	PT	1,112.0	GrDi	単独		
03	SB01	竈No.10	Ⅰ	○	PT1	804.0	HSa	単独		
04	SB01	竈No.11	Ⅰ	○	PTC	15,300.0	QuPo	QuPo01		
05	SB01	竈No.12	Ⅰ	○	PT1	10,600.0	GrDi	単独		
06	SB01	竈No.13	Ⅰ	○	PTC	6,000.0	QuPo	QuPo01		
07	SB01	竈No.14	Ⅰ	○	PT1	1,836.0	GrDi	単独		
08	SB01	竈No.15	Ⅰ	○	PT	3,665.0	GrDi	単独		
09	SB01	竈No.16	Ⅰ	○	PTC	3,010.0	Gr	Gr01	R01	
10	SB01	竈No.16	Ⅰ	○	PT1	2,486.0	Gr	Gr01	R01	
11	SB01	竈No.17	Ⅰ	○	PT1	20,300.0	Gr	単独		
12	SB01	No.31	Ⅰ	○	PT1	598.0	HSa	単独		
13	SB07	No.2	不明	○	PT1	4,415.0	QuPo	単独		
14	SB07	No.4	Ⅰ	○	PT1	2,414.0	HSa	単独		
15	SB07	No.5	Ⅰ	○	PT1	1,374.0	GrPo	単独		
16	SB07	No.6	Ⅰ	○	PTC	1,050.0	QuPo	QuPo02	R02	
17	SB07	No.7	Ⅰ	○	PT1	556.0	GrDi	単独		
18	SB07	No.8	Ⅰ	○	PT1	1,416.0	QuPo	単独		
19	SB07	No.9	Ⅰ	○	PTC	2,094.0	QuPo	QuPo02	R02	
20	SB07	No.10	Ⅰ	○	PT1	1,538.0	QuPo	単独		
21	SB07	No.20	Ⅰ	○	PT1	3,035.0	GrPo	単独		
22	SB07	No.21	Ⅰ	○	PT1	2,855.0	GrPo	単独		
23	SB07	No.22	Ⅰ	○	PT1	2,466.0	QuPo	単独		
24	SB07	No.23	Ⅰ	○	PT1	1,976.0	An	単独		
25	SB07	No.24	Ⅰ	○	PT	1,574.0	Gr	単独		
26	SB07	No.25	Ⅰ	○	PTC	5,900.0	QuPo	QuPo03	R03	
27	SB07	No.26	Ⅰ	○	PT1	1,882.0	An	単独		
28	SB07	No.27	Ⅰ	○	PT1	1,610.0	GrPo	GrPo01	R04	
29	SB07	No.28	Ⅰ	○	PT1	246.0	GrDi	GrDi01		
30	SB07	No.29	Ⅰ	○	PT1	1,538.0	GrDi	単独		
31	SB07	No.30	Ⅰ	○	PTC	2,715.0	QuPo	QuPo04	R05	
32	SB07	No.32	Ⅰ	○	PT1	808.0	GrDi	単独		
33	SB07	No.33	不明	×	PT1	6,100.0	QuPo	単独		
34	SB07	No.34	Ⅰ	○	PT	304.0	Di	単独		
35	SB07	No.35	Ⅰ	○	PT	164.0	QuDi	単独		
36	SB07	No.36	Ⅰ	○	PT1	362.0	GrDi	単独		
37	SB07	No.37	Ⅰ	○	PT1	248.0	CoSa	単独		
38	SB07	No.38	Ⅰ	○	PT	236.0	Gr	単独		
39	SB07	No.39	Ⅰ	○	PT	42.0	Gr	単独		
40	SB07	No.40	Ⅰ	○	PT	484.0	Tu	単独		
41	SB07	No.41	Ⅰ	○	PT	284.0	CoSa	単独		
42	SB07	No.42	Ⅰ	○	PT	706.0	An	単独		
43	SB07	No.43	Ⅰ	○	PT1	1,266.0	An	単独		
44	SB07	No.44	Ⅰ	○	PT1	1,124.0	QuPo	QuPo04	R05	
45	SB07	南東	不明	×	PTC	274.0	QuPo	QuPo03	R03	
46	SB07	南東	不明	×	PT1	218.0	QuPo	QuPo05		
47	SB07	南東	不明	×	PT2	86.0	QuPo	QuPo02	R02	
48	SB07	南東	不明	×	PT2	68.5	QuPo	QuPo05		
49	SB09	No.10	Ⅰ	○	PT1	1,300.0	An	単独		
50	SB09	No.11	Ⅰ	○	PT1	940.0	HSa	HSa01	R06	
51	SB09	No.12	Ⅰ	○	PT1	934.0	HSa	HSa01	R06	
52	SB09	No.14	Ⅰ	○	PT2	1,598.0	GrDi	単独		
53	SB09	No.15	Ⅰ	○	PT	962.0	An	単独		
54	SB09	No.16	Ⅰ	○	PT1	450.0	An	An01	R07	
55	SB10	No.15	Ⅰ	○	PT	206.0	An	単独		
56	SB10	No.16	Ⅰ	○	PT	552.0	HSa	単独		
57	SB10	No.19	Ⅰ	○	PT	1,326.0	An	単独		
58	SB10	No.20	Ⅰ	○	F	66.0	QuPo	単独		
59	SB10	No.21	Ⅰ	○	PT1	180.0	Gr	単独		
60	SB10	No.23	Ⅰ	○	PT2	110.0	Gr	単独		
61	SB10	No.24	Ⅰ	○	PT1	700.0	An	An01	R07	
62	SB10	No.25	Ⅰ	○	PT	724.0	Gr	単独		
63	SB04	No.1	不明	○	PTC	904.0	GrPo	単独		
64	SB11	No.15	Ⅰ	○	PTC	4,815.0	GrDi	GrDi02	R08	
65	SB11	No.16	Ⅲ	○	PT	1,000.0	Gr	Gr02	R09	
66	SB11	No.17	Ⅲ	○	PT1	2,462.0	GrDi	GrDi02	R08	
67	SB11	No.18	Ⅲ	○	PTC	4,160.0	QuPo	単独		
68	SB11	No.19	Ⅲ	○	PT1	3,445.0	An	単独		
69	SB11	No.20	Ⅲ	○	P	2,002.0	Di	-		
70	SB11	No.21	Ⅰ	○	PT	338.0	QuDi	単独		
71	SB11	No.22	Ⅰ	○	PT1	2,775.0	GrDi	単独		
72	SB11	No.23	Ⅰ	○	PT2	2,076.0	HSa	単独		
73	SB11	No.24	Ⅲ	○	PT1	1,498.0	HSa	単独		
74	SB11	No.25	Ⅰ	○	PTC	2,360.0	QuDi	単独		
75	SB11	No.26	Ⅰ	○	PT	1,452.0	QuPo	単独		
76	SB11	No.27	Ⅲ	○	PT	348.0	QuDi	単独		
77	SB11	No.28	Ⅰ	○	PT	150.0	GrDi	単独		
78	SB11	No.29	Ⅲ	○	PT1	1,220.0	GrPo	GrPo01	R04	
79	SB11	No.30	Ⅲ	○	PTC	106.0	Gr	Gr02		
80	SB11	No.31	Ⅰ	○	PT1	1,696.0	GrDi	単独		
81	SB11	No.32	Ⅰ	○	PT1	862.0	GrDi	GrDi01		
82	SB11	No.33	Ⅰ	○	PT1	548.0	QuPo	単独		
83	SB11	No.34	Ⅲ	○	PT1	3,675.0	GrDi	単独		
84	SB11	No.35	Ⅰ	○	PT	820.0	Gr	Gr02	R09	
85	SK10	覆土	不明	×	P	2,314.0	GrDi	-		
86	SK11	-	不明	×	PT1	608.0	QuDi	単独		
87	TG	-	不明	-	PT	4.2	Sa	単独		
88	TK	-	不明	-	PT	16.4	Sa	単独		

第13表　石器属性一覧

Ⅵ 付編

今回の調査では土器・陶磁器、鉄製品、石器の他に炭化材が２点出土しており、これら炭化材の年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その結果報告を以下に記載する。なお文中においては、それぞれの炭化材を「ＦグリッドNo.２」、「調査区掘り下げ北東部 炭（南）」と表記しているが、「ＦグリッドNo.２」はＳ3W7、「調査区掘り下げ北東部 炭（南）」は第5号住居址内に該当する地点から出土している。

岡の宮遺跡出土炭化材放射性炭素年代測定業務委託報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岡の宮遺跡の１次発掘調査により、古墳時代前期および平安時代後期の竪穴住居・土坑・ピットなどが検出されており、それに伴い土器（土師器・須恵器）・陶磁器（灰釉陶器・緑釉陶器）・金属製品・炭化材などの遺物が出土している。これらの発掘成果から、本遺跡は４世紀、10～11世紀頃の各時期の集落遺跡であったと考えられている。今回の分析調査では、これらの遺構から出土した炭化材の放射性炭素年代測定により、本遺跡の年代に関する資料を得る。また、炭化材の樹種同定を行い、用材についても情報を得る。

1. 試料

試料は、調査区南部のＦグリッドの、古墳時代初頭と思われる土器片が多数出土した遺物包含層から出土した炭化材（試料番号１）と、調査区北東部から出土した炭化材（試料番号2）の計2点である。

Ｆグリッドは、調査区の南部に位置する。Ｆグリッド付近の包含層では出土遺物が多く、古墳時代初頭（4世紀）の土器片が多数出土している。測定試料は、これらの遺物とともに出土した40ｃｍ×10cmほどの炭化材の一部である。なお、周辺から、その他の炭化材は出土していない。

また、調査区北東部から出土した炭化材は、古墳時代前期（4世紀）の土器がまとまって出土した一帯を掘り下げた際に出土したものである。出土した正確な地点と層位は不明であるが、土器が集中した付近には5号住居址があり、これらの遺物は本来5号住居址覆土上層に包含されていたと考えられている。5号住居址は古墳時代前期とされており、東半分が調査区域外にかかるが、平面形は一辺6.8m前後の隅丸方形を呈すと推定される。カマドや炉の検出はなく、遺物は多数出土するが破片が多い。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室の協力を得た。なお計算には、放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5570年を使用した。また、付記した誤差はβ線の計測値の標準偏差σに基づいて算出した年代で、標準偏差に相当する年代（真の値が66.7％の割合でこの範囲内にあるということ）である。

同位体比は、標準値からのずれをパーミルで表した年代である。δ13Ｃの値は、試料炭素の13Ｃ／12Ｃ原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて算出した値である。表中の測定年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1に示す。出土炭化材の年代値は、ＦグリッドNo.2が約2200年前、調査区掘り下げ北東部 炭（南）が約1600年前の値を示す。

表1　放射性炭素年代測定・樹種同定結果

試料名	試料の質	樹種	測定年代　ＢＰ	δ13Ｃ(‰)	Ｃｏｄｅ No.
ＦグリッドNo.2	炭化材	不明	2710±70	-30.3	Ｇak－20678
調査区掘り下げ北東部　炭（南）	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	1610±80	-29.9	Ｇak－20679

(1) 年代値：1950年を基準とした値

(2) δ13Ｃ：試料炭素の13Ｃ／12Ｃ原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて算出した値

(2)　樹種同定

ＦグリッドNo.2は、道管を有することから広葉樹材であるが、保存状態が悪く、種類の同定には至らなかった。調査区掘り下げ北東部 炭（南）は、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect.Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

4. 考察

調査区南部Ｆグリッドから出土した炭化材の年代は、キーリ・武藤（1982）によれば縄文時代晩期に相当する値であり、発掘調査所見と異なる。この炭化材は多数の土器片とともに出土したが、他の炭化材が出土しないことや、遺構に伴う試料ではないことから、周辺から出土した遺物とは関連性が低い試料である可能性もある。また、古材の再利用などにより、測定試料の堆積した年代と、測定試料本来の年代（すなわち測定年代）とが異なる可能性がある。よって、本試料の年代測定結果は、周辺から出土した遺物の時期を示す資料にはならない可能性がある。今後は、他の出土炭化材や関連遺物の年代値を測定して、その年代傾向を把握し再検討することが望まれる。

一方、調査区北東部から出土した炭化材の年代値は、4世紀中頃に相当する値であり、発掘調査所見と一致する。放射性炭素年代測定においては、測定法自体が持つ誤差や、時代による大気中の14Ｃ濃度の違いなどにより、測定年代値が暦年代とは一致しない。特に、放射性炭素年代と暦年代のずれは、古くなるほど大きくなることがいくつかの分析例で出されているが、例えば数千年前では500～800年ほど放射性炭素年代のほうが若い傾向を示し（中村，2000)、同文献に記載されているStuiver and Reimerの較正曲線では2000～1700年前の間で、放射性炭素年代は暦年代に比べて最大100年程度古い方へずれている。さらに、東村（1990）にある放射性炭素年代・年輪年代較正値のデータでは、放射性炭素年代の約600年前頃を境として、それより以前は約2000年前までは放射性炭素年代の方が古く、以後は約100年前までは放射性炭素年代が新しい方へずれている。よって、年代値は前後それぞれ最大100年間程の幅で考えられる。これらのずれを考慮しても、本来５号住居址に帰属する可能性のあるこの炭化材の年代は、4世紀中頃～5世紀中頃の可能性がある。

引用文献

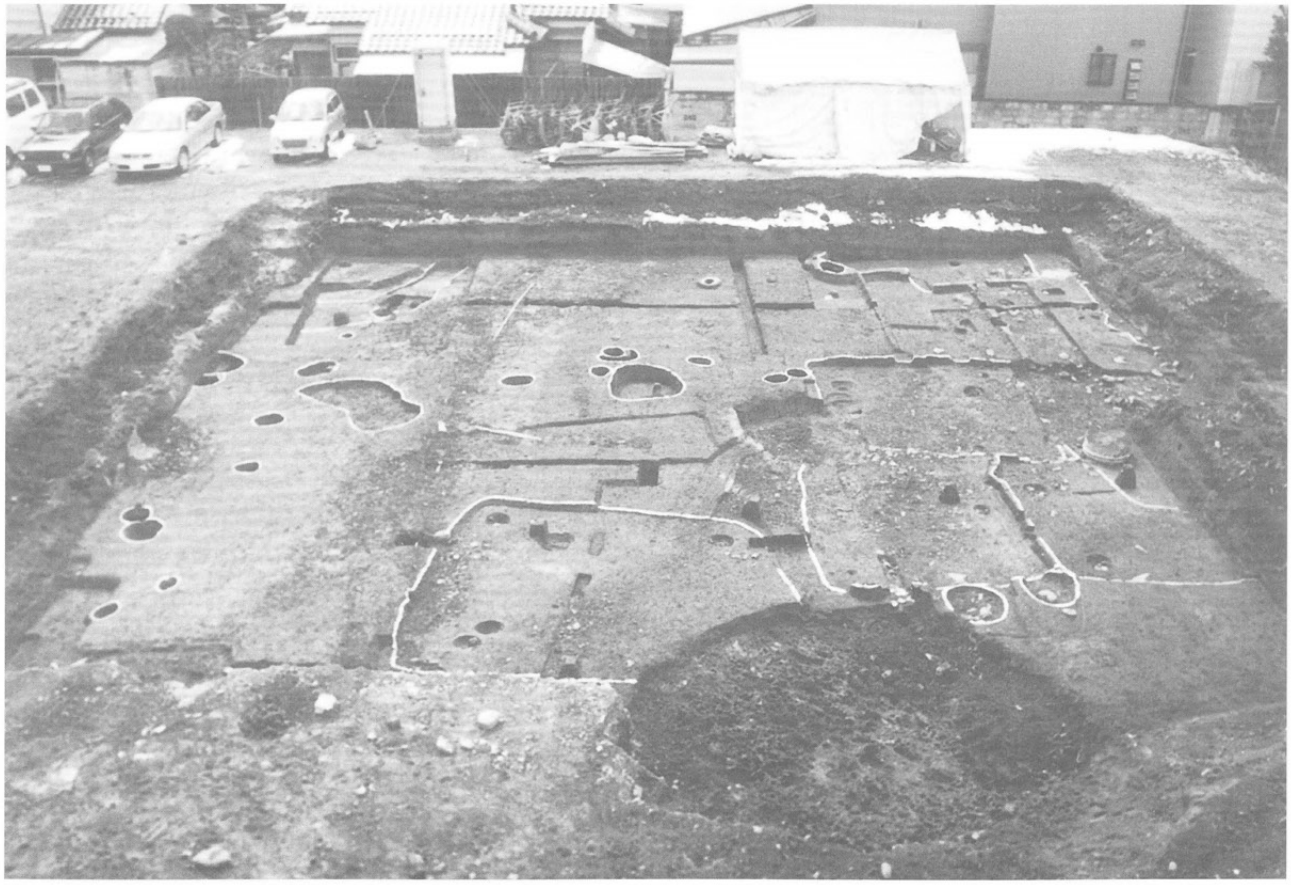
東村武信（1990）改訂　考古学と物理学．212p，学生社

キーリＣ.Ｔ・武藤康弘（1982）縄文時代の年代，「縄文文化の研究１縄文人とその環境」，p246－275雄山閣

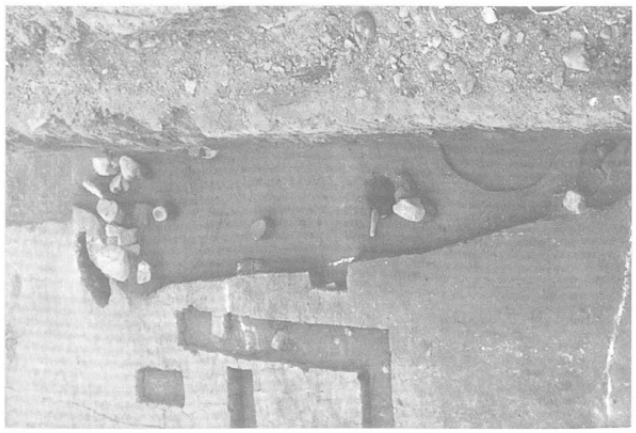
中村俊夫（2000）　14Ｃ年代から暦年代への較正．日本先史時代の14Ｃ年代編集委員会編「日本先史時代の14Ｃ年代」，p21－40

写真図版　1

調査区全景（東から）

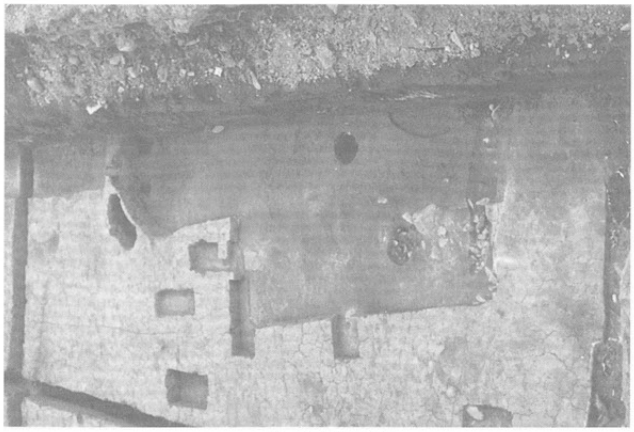


調査区全景（北から）

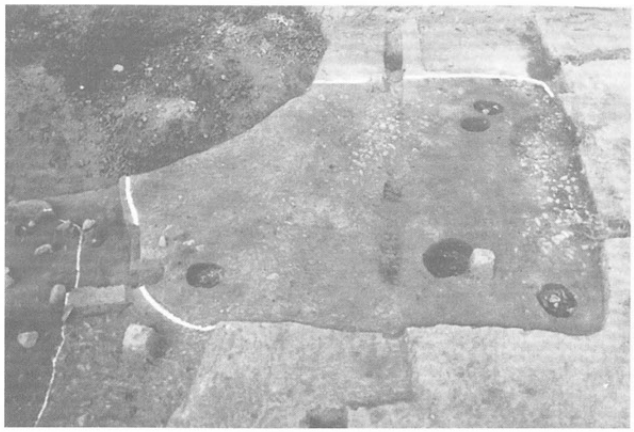


1住出土状況

7住出土状況



1住完掘状況



7住完掘状況

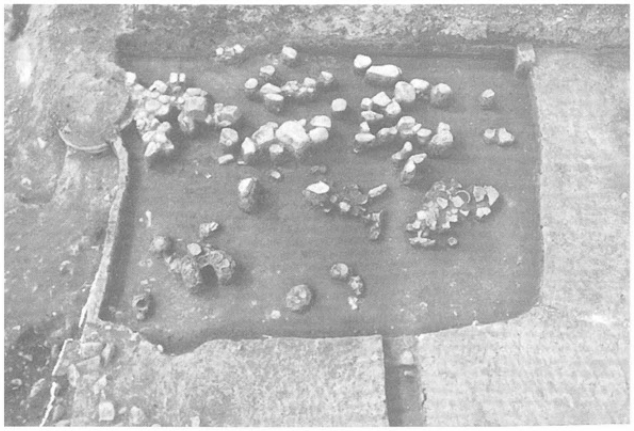
1住カマド

7住出土遺物

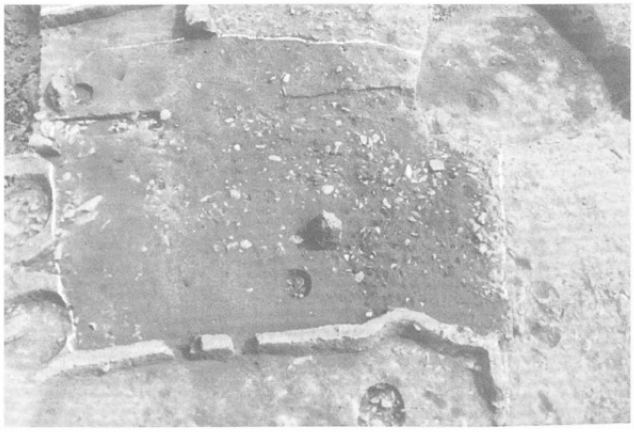
4住完掘状況

5住完掘状況

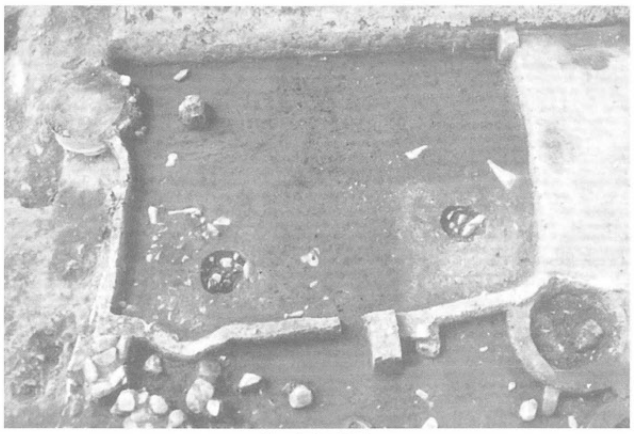
9住出土状況



10住出土状況



9住完掘状況



10住完掘状況

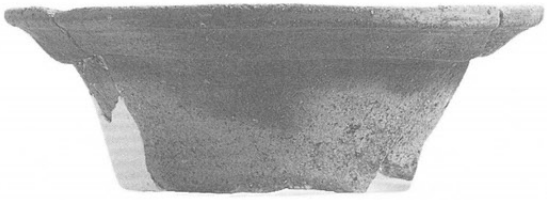
9住出土遺物

10住出土遺物

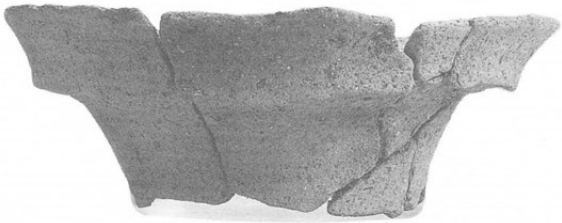
11住出土状況

11住完掘状況

21



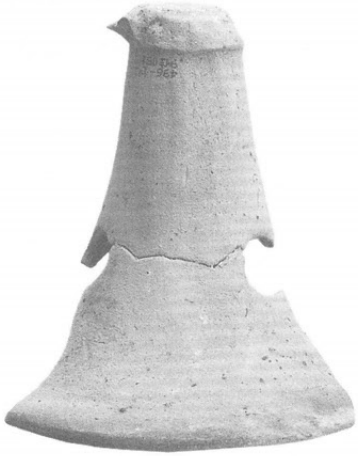
25



42

17

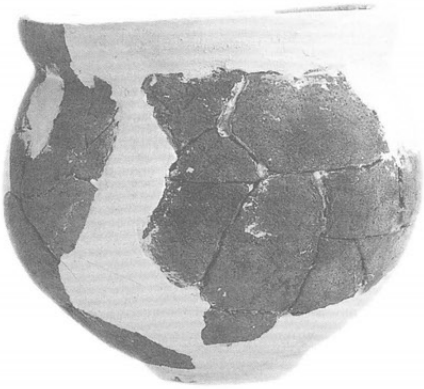
14



8

27

37



58

長野県松本市岡の宮遺跡Ⅰ緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし　おかのみやいせき１　きんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県松本市　岡の宮遺跡Ⅰ　緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No.153
編著者名	直井雅尚、田多井用章、小山高志、太田圭郁
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390－8620　長野県松本市丸の内3番7号　TEL　0263－34－3000(代) （記録・資料保管：松本市立考古博物館　〒390－0823　松本市中山3738－１　TEL　0263－86－4710）
発行年月日	2001（平成13）年3月23日　　（平成12年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おかのみや 岡の宮	ながのけんまつもとし 長野県松本市 めとば 女鳥羽3丁目563－14	20202	496	36度 14分 30秒	137度 58分 54秒	20000220～ 20000322	267㎡	民間マンション建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡の宮	集落址	古墳 平安	竪穴住居址　9軒 土坑　13基 ピット　14基	土器・陶磁器 （土師器、灰釉陶器、緑釉陶器） 鉄製品（刀子、鎌、鎹、釘） 石器 炭化材	新発見の遺跡。古墳時代前期と平安時代中期から後期の集落址。従来、女鳥羽川の氾濫により古代の遺跡は無いと考えられていた地域にあたり、遺跡立地等の再検討を提起した。

松本市文化財調査報告No.153

長野県松本市　岡の宮遺跡Ⅰ　緊急発掘調査報告書

発行日　平成13年3月23日

発　行　松本市教育委員会　　〒390－8620　長野県松本市丸の内3番7号

印　刷　精美堂印刷株式会社　　〒390－0815　長野県松本市深志3－4－20